
真・恋姫†無双 キンモクセイと羽ばたく鳥

にわとり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 キンモクセイと羽ばたく鳥

【Nコード】

N3135W

【作者名】

にわとり

【あらすじ】

揚州で農民として暮らしていた飛鳥は、孫策と出会うことで戦乱の世へ飛び込むことになる。

だが、彼の幼馴染は敵の陣営に所属し、飛鳥の前に立ちふさがる……

これは、呉 原作再構成、オリ主人公物です。

一刀は魏に所属しています。

01・プロローグ（前書き）

はじめまして、にわとりと申します。

こういった物を書くのは初めてなので、温かい目で見てくださいと幸いです。

01. プロローグ

『ねえねえ、この単語はなんて意味なのかしら？』

『うーん、これは軍師ってお仕事のことだと思う』

懐かしい記憶。

『それって、どんなお仕事なの？』

『君主さまに自分の知略を尽くして、頑張ってもらおう仕事かな？昔の、張良って人が有名なんだって』

絶望に満ちていた俺の世界に

『軍師……決めた！私軍師になるわ！この、張良って人みたいになる！』

『そのためには、もっとたくさん勉強しないとね』

『それじゃ、あなたは将来何になるの？』

『俺？そうだな、畑でも耕してるんじゃないかな？』

やすらぎと希望をくれた少女との

『ふん！そんなつまらない人生かわいそうだから、あなたは私の部下にしてあげるわ！感謝しなさい！』

『……ああ。ありがとう』

『私の部下になるんだから、あなたには私の「真名」を授けてあげる。私はね……』

懐かしく、やさしい記憶

「ん……いつのまにか眠っちゃったみたいだな」

大きなあくびをしながら、机の上の本の山を眺める。

「今日こそは読み終えようと思ってたんだけどなー」

はぁー。と大きなため息をつく。

「でも、今日は良い一日になりそうだ」

なんとって、夢で君に会えたんだもの。

さあ、今日は待ちに待った収穫の日、がんばるぞ！

01. プロローグ（後書き）

今回はプロローグということで、少々短めでした。

主人公設定

姓：賈 名：羽 字：文鶴 真名：飛鳥あすか

容姿は、可もなく不可もなく平均的。身長は180くらい、髪は黒色で長さは、後ろは首に掛からないくらい、前、横は目、耳の掛からないぐらいの髪型。年齢は十八歳。

武器は斑鳩いかるがと言う名前の弓。

弦の反対側に刃がついたもの。モデルは獣神演舞の霜纏弓。

双翼になっており、上と下で分離し、双剣として使うことが出来る。

上の部分は漆黒で青葉梟あおはばすくという名前。下の部分は真紅ひれんじやくで緋連雀ひれんじやくという名前。

目上の人には丁寧な言葉遣いを心がける。

滅多に怒ることが無く温厚。唯一頭を触ろうとすると怒る。

幼馴染のことを子供の頃からずっと想い続けており、他の女性は恋愛対象ではない。

幼少の頃に受けていた虐待の所為で、叩く、蹴るなどの攻撃を受けると、抵抗できなくなる。凧が天敵。剣で打ち合うことは出来る。農民の癖に弓が得意で、武力は祭と同等。知力は穏クラスとチート仕様。

良くも悪くも自己中心でマイペース。でも、仕事は期日までに終わらせる。

光栄風ステータス：統率力82 武力83 知力92 政治86

02・我が名は鶴の坊主

「おーい！鶴の坊主ー！こっち手伝つてくんねーかあ？」

「はいはい！分かりました、すぐ行きます！」

俺は、揚州丹陽郡丹陽県の、とある農家だ。季節は秋。どこの村も今は収穫の真っ最中だ。

今年は五年ぶりの豊作。去年、一昨年と凶作だったため、皆も生き生きしてるようだ。

「おいおい、何ぶつぶつ言ってんだ？口を動かす前に、手を動かせ！鶴の坊主、分かったか？」

「はいはい、ちゃんとやってますよ！それよりいい加減に、鶴の坊主って呼ぶの止めてくれませんか？」

俺の字は文鶴。鶴の坊主ってのは、字の鶴から取ったあだ名だ。

「それじゃ、なんて呼べば良いんだ？鶴の坊主」

「はあー。じゃあもう良いです。このやり取りもう既に百回以上してるんで」

「ところでよ、お前あの噂聞いたか？」

「噂？なんのですか？」

「天の御遣いの噂だよ」

天の御遣い……管輅という占い師が触れ回っているものらしい。何でも、この乱世に平穩をもたらすが、眉唾物だな。

「知っては居ますが、どうでも良いですね」

「……お前ならそう言うとは思ってたが、もう少し夢を持とうぜ？」

「夢よりも、今日の生活のほうの方が大事でしょ？」

「まあ、そうなんだけどよー」

俺は現実主義者だから、高望みはしない。一度それで失敗したことがあるし。

「それじゃ、これは聞いたか？」

まだ何かあるのだろうか？どうせ、益州のほうで龍が現れたとか、そんな感じだろう。

「今日、この村に商人が来てるんだ。いつもの宿に泊まってらしいぞ」

「な！それを早く言ってくださいよ！ちょっと行ってきても良いですか？」

「ああ。行ってこい行ってこい」

「失礼します！」

半年に一度この村に来る商人。
俺の唯一の楽しみである本が買える数少ない機会だ。

「おじさーん！お久しぶりです」

「おお！鶴の小僧か。今回もお前のためにいっぱい本を持ってきたぞ！」

今回は十冊くらいか、はて、いくら位かな？

「これ全部でいくらくらいですか？」

「そつだな、これ位でどうだ？」

「……分かりました、ちょっと待っていてください」

家へ戻り、金の入った麻袋をもって商人のいる場所へ急ぐ。

「はい、持ってきましたよ」

「おう、ありがと。どうだ？今年は豊作か？」

「はい。久しぶりなんで俺も嬉しいです。ところで、最近何か変わったことはありませんでしたか？」

商人の人には、本だけでなく、様々な情報を持ってきてもらっている。

「そつだなあ、一番新しいことといったら、江東の孫堅が死んで、

その勢力を袁術が吸収したってことかな？」

「え！あの孫堅がですか？」

孫堅といえ、江東の虎と名高く、その娘の孫策もかなりのものだと聞く。

「うん。それと、匪賊の輩が急速に増加してるみたいだ。何でも、誰か指導者がいるってのが、情報筋の見解だな」

それは分かる。ここ揚州でも、賊の類は増加する一方だ。

「あと、公孫贄様がタク郡の、曹操様が陳留の太守に任じられたそう。目新しいことはそれ位かな？」

「ありがとうございます」

「そうそう、今日はお前にお願いがあつたんだ。明日、俺と一緒に南陽へ行ってくれないか？」

「南陽……ですか？」

確か南陽は、袁術が支配している土地だ。

「ああ、ここに来る途中で、雇ってた用心棒がいなくなっちゃって、お前なら大丈夫だろ？それに、大きな街はお前見たことないだろうから、良い機会だと思ってる。要するに、観光だと思ってくれれば良い」

「……分かりました。明日ですな？」

「そつだ。お願いな！」

はあー。今は収穫作業に戻るか。

……翌日

「いつ見てもお前の馬は美しいよなー」

「そうですか？毛並みの手入れは欠かしてませんが、それ以外には何もしてませんよ？」

俺の馬は、真っ白な毛並みを持つ白馬だ。元々は幼馴染の物で、譲られたものだ。

「ちゃんと剣は持ったか？さっさと行こうぜ」

それから南陽まで数日間、数回賊に襲われながらも、無事にたどり着くことができた。

02・我が名は鶴の坊主（後書き）

誤字、脱字、感想などがあれば、よろしくお願いします。

03・お巡りさん！酒泥棒です！

「ここが南陽かー、俺の村とは比べ物にならないくらいでかいなー。それにしても……」

「つ、疲れた……」

「ここまで疲れるとは思わなかった。というか、こんなに遠いとは思わなかった。」

「やっぱり、地図を見るだけじゃ分からないことはあるんだな。」

「お疲れー、ありがとな！これ、今回の報酬な。俺は次の街に行くから、お前はもう戻っても良いぞ」

「ありがとうございます……お気をつけて」

「気を取り直して、街でも回るか。」

「しかし、ハチミツの店がかなり多いのはなぜなんだ？」

「街をしばらく回って、一番感じた疑問がこれだ。」

「でも、あまり活気があるわけではなかった。やはり、袁術は名君では無いようだな。」

「孫策には一度会ってみたくはあるけど……」

「一農民が会える立場の人じゃないからなー。」

「あ、ねえねえおじさん。ちょっと聞きたいんだけどいいかな？」

俺はやつと見つけた普通の肉まん屋のおじさんに尋ねる。

「ここ以外にまともな肉まんは売ってなかった。『八チミツ肉まん』とかあったからな。おいしいのか？」

「ここって、何でこんなに八チミツ屋が多いの？」

「ん？お前は旅の者か？八チミツはな、袁術様の好物なんだ。それで袁術様が、

『南陽で八チミツを扱う店を出したら税を五割免除』
って法律を作ったからこんなにも多いんだよ」

呆れた。そんなくだらない理由だったのか。しかし、八チミツっておいしいんだろうか？生涯で一度は食べてみたい。

「話してくれてありがと、肉まん一個もらえる？」

「しかし、自分の私利私欲のために法律を作るって、どんな太守だよ」

肉まんを食べながら街を歩く。……これ美味しいな。

「はふはふ、やっぱり都会は違うのかな」

「ん？あいつは……何をやってるんだ？」

酒屋の路地裏にいたのは、挙動不審な女。

褐色の肌を持ち、桃色の髪をたなびかせているその女性は美人ではあると思う。

だが手に酒瓶を持ち、酔っている様子がそれを台無しにしていた。さらに、時折回りを警戒しているのが、怪しさを倍増させている。

明らかにおかしい。まさか……酒泥棒か！？

そういえば、すぐそこに酒屋があつたな。でも、そう考えると全部納得できる。

つかまえて連行するか……

「あの、何をしているんですか？」

まずは友好的に、やさしく笑みを浮かべる。

女性はビクツと肩を震わせると、恐る恐るといった様子でこちらを見て、安堵した表情をした。

「はあくびっくりした。冥琳かと思つたじゃない」

冥琳？真名なのは分かるが、誰だろうか？いや、今そんな事はどうでもいい。

「それで？私に何か用なの？私は忙しいんだから、早く済ましてくれる？」

「それじゃ、おとなしく捕まってくださいね」

笑みを絶やさないようにしながら剣を抜く。傍からみたらかなり

不気味だろう。

「……隠密だったの。劉表のところのかしら？」

女性はスラリと剣を抜く。装飾が施されているのを見る限り、宝剣のようだな。

「それも盗んだ物なのか？」

「何を言っているのか、分からないわね！」

喋り終わると同時に、左側から斬りつけてくる。

キン！

それを受ける。確かに速さも力もあるけど、見切れないほどではない。

「はああ！」

切り返して斬りさく。剣を向けたのだし、腕の一本や二本は構わないだろう。

「くうううー！」

速さに追いつかなかったようで、おかしな体勢で吹き飛ばす。

すぐに立ち上がり、再び剣を構える。案外と粘るな、さっきので終わると思ったんだけど。

「はー！はー！はあー！」

喉、胸、腹、と突いて来る。それを全て弾き返し、攻撃の隙を突き強く踏み込んで斬り込む。

この女性もなかなかやるようで、簡単に防がれ、鏢迫り合いになる。

「貴方、何者なの？私と同等の強さを持った人間なんて、この世にそついるわけじゃない」

「俺ですか？揚州丹陽郡に住む農民ですけど、何か？」

「……馬鹿にしてるのかしら、この私が農民に同じだと言っているの？」

んんん？何かただならぬ雰囲気。殺気が痛い。

「まあいいわ。ここで私が死んだら、私はその程度だったってことよ」

死を覚悟したような顔つきで俺を睨んでくる。

「はあああああ！」

ガン！

く！速い！上段でぎりぎり刃を受ける。

「まだまだあ！」

ギン！ギン！ガガガン！

斬撃の応酬。上から、左から、右からと剣が飛んでくる。

「く！やられてたまるか！」

その応酬の中から隙を見つけ、剣を振り上げる。

バリイン！

俺の剣は砕け散り、女性の剣は宙を舞い俺の後方へ突き刺さる。

「勝負アリだな……」

危なかった、後一瞬判断が遅れていたら死んだのは俺だろう。殺すつもりもないが。

「私の負けね。貴方は本気でやってないように思えたし」

「あ、バレた？でも、かなり本気出したよ？」

女性の持っていた剣を拾い、女性に歩み寄る。疲れた。最近は賊しか相手にしてなかったから、鈍ってるな。

「それじゃ、来てもらおうか」

「どこにかしら？」

「どこって、孫策様の居城へお前を連行するんだ。そのあとに、しかるべき罰を加えてもらう」

「はい？……今なんて言ったかしら？」

耳が悪いのかな？はつきり言っただつもりなんだが……

「だから、酒泥棒であるお前を連行するんだって」

「……貴方、孫策の顔を知ってるの？」

「いや、でも江東の虎の娘だから、すごい覇気をまとっているはずだし、すぐ分かるだろう？」

はぁー！。と深いため息を吐く女性。え？何か呆れられるようなこと言っただけ？

と思っただら、今度はニヤニヤしだしたぞ？怖っ！

「まあいいわ、それじゃ、さっさと連行しなさい。城はあっちだから」

「ん、ありがとう」

親切な酒泥棒だ。世の中がこういう人ばっかだっただら良いんだけどなー。

03・お巡りさん！酒泥棒です！（後書き）

どうやら、私は戦闘シーンを書くのが苦手のようです。
次も戦闘あるけどどうしよう……

あと、雪蓮様の口調もどこか違う気がする……

雪蓮様との対決、一部修正しました。

04・自称孫策と重罪人（前書き）

前回のあとがきで、今回戦闘シーンあるよ。

と言っていたわけですが、作者の都合（主に文才）によりカットとなりました。

04・自称孫策と重罪人

酒泥棒の女性、ここでは自称孫策と呼ぶことにするが、彼女は俺を城へ案内すると言った後、何かを思い出したように顔を真っ青に染め上げ、あるうことか、孫策様の名を騙り、逃げようとしていた。

「は、放して頂戴！このまま城に帰ったら、冥琳に殺される……」

「ああ、もう！あなたがお酒なんか盗むからいけないんでしょう？罰を受け入れて、改心してくださいね」

ちなみに、俺は自称孫策を逃がさないように縄でぐるぐる巻きにした。

なので、犬やら猫を散歩させている感じである。犬と違って恐ろしく強暴だが。

しかし、本当に八チミツだらけだな。……ちょっと食べてみるか。

「ねえ、八チミツ饅頭食べたい？」

自称孫策に問いかける。さっきまで死んだ魚の目をしていたが、それを聞いた途端、目が輝きだした。

「奢ってくれるの！？ちょうど酔いがさめて、お腹が空いてきた頃よ！私、八チミツ餡饅頭だからね！」

はあー。現金なやつだ。しかし、何でこんな人の良さそうな人が盗みなんか犯したんだろう？しかも酒。

「はいはい、ちょっと待っててくださいね。どこにも行っちゃ駄目ですよ！」

えーっと、たしかハチミツ杏饅頭だったけ？へえー。饅頭の中にハチミツ杏仁が入ってるのか。俺もそれにしよ。

「すいませーん、ハチミツ杏饅頭を二つお願いします」

「ハチミツ餡饅頭ですか？」

饅頭にハチミツの餡子が入った物を見せられる。それじゃなくて

……

「いえ、ハチミツ杏饅頭です。あの、饅頭に杏仁豆腐が入ってるやつ」

「あゝ、はいはい。読み方が同じなんで間違えやすいんですよー」

あー、そう考えればそうだ。紛らわしいな。俺がちゃんと訂正してよかった。

「おーい、ハチミツ杏饅頭買って来たぞー」

「早く頂戴！はやくはやく！」

どんだけ腹が減ってるんだよ。そんなに減ってるんだったら、ハチミツラーメンとかでも良かったかな？俺は絶対に食べないけど。

自称孫策に、饅頭の入った袋を渡す。彼女は周りに嬉しいという

気持ちを振りまきながら袋を開け、動きが止まる。

「ん？どうした、食べないのか？結構おいしいぞ？」

「ねえ、これは何かしら？」

な、何なんだ？さっきと違って急に殺気を振りまきだした。……
今自分で言っとうまいと思った、ごめんなさい。さっき、殺気。

「私が買ってきて、って言ったのは『八チミツ餡饅頭』よ？」

「だ、だから『八チミツ杏饅頭』だろ？」

「これは、『八チミツ杏饅頭』なの！私が頼んだのは『八チミツ餡饅頭』！」

え？『はちみつあんまんじゅう』じゃないの？

あ！そういえば、餡と杏で、読み方が同じだったんだ！

「早く替わりのものを買ってきなさい！」

「りよ、了解しました！」

な、何だっただ……あの女性に逆らえる気がしない。

「はあ、はあ、か、買ってきましたよ……」

彼女の目に根源的な恐怖を覚えた俺は、全速力で走って買ってき
た。

「うん、よろしい」

今の女性にさっきのような殺気はなかった……
こいつ何者なんだ？

「あ、城が見えてきましたねー。ほら、行きますよー」

自称孫策をずるずる引きずりながら孫策様の居城へ近づく。再び
主導権は俺に移っていた。

城の前には、これまた美人な女性がなにやら焦ったようにおろ
ろしていた。

「いったい策殿はどこに行ってしまったのか……むうー！冥琳
め、街で策殿を見張っておけなど、無理に決まるとるんじやい！だ
いたい……………」

ぶつぶつ何かを言っているが、あの人は大丈夫だろうか？

「いやーだ！いやーだ！行ーきーたーくーない！」

この人も大丈夫だろうか？饅頭なんか買っただけならば良かっ
た。

まな板の上の鯛のようにびちびちと跳ねる自称孫策。

「さあ、行ーきーまーすーよー！」

「まったく、これじゃから公瑾は……………」

「どうやら、この女性は公瑾って人の悪口を延々とやっているようだ。」

「あれ？公瑾ってどこかで聞いたことが……………」

「ん？おお、すまんすまん。わしになんか用かの？」

「女性が俺に気づき、声をかけてくる。」

「えとですね、この人が盗みを犯したので捕まえてきたんです」

「死んだ魚のように動かない自称孫策を指差す。」

「む？この服装、どこかで見たことがある気が……………策殿？策殿ではないか！なぜ盗みなんか犯したんじゃ！」

「女性が自称孫策を肩をぶんぶん揺すっている。うわー、俺がやられたら吐くな。」

「さ、祭、ちょっと、止めて！このままじゃ、死んじゃう！」

「どうやら、マジで死にそうなのに気づいたようだ。自称孫策でもこれには同情するよ。」

「で？どういふことなんじゃ？盗みを働いたなんて冥琳が知ったら、死刑すら生ぬるい罰を受けさせられるような気がするんじゃ……………」

「……うん。さっき見た事のように想像できるわね」

二人でうんうん頷いている。

「でもね、私は盗みを働いたわけじゃないのよ？この子が勘違いを
しただけなんだから」

むむ、まだその嘘を引きずるのか。往生際が悪いやつめ。

「どういうことじゃ？策殿。………策殿？どうしたんじゃ？そん
なに汗を浮かべて」

女性の後ろには、悪鬼羅刹ですら裸足で逃げ出すような形相を浮
かべた女がいた。

「……お前たちは、こんな所で何をやっているか！！！」

その女は、一騎当千の者ですら萎縮するほどの大声で叫んだ。

当然、その声量で怯えないわけもなく、

「ひうう！え、えーつとね？冥琳、私がお酒を飲みながら街を歩い
てたら、この子が私のことを酒泥棒だと勘違いしたみたいで……あ、
しまった」

自分がお酒を飲んでいたらと墓穴を掘ったことに気づいた自称孫策。

「ほーう。こーんな真昼間から街をほつつき歩きながら酒を飲んで
いる女が、酒泥棒に見えないと言うことか。お前の考えはよく分

「かつたぞ」

なお威嚇するような言葉遣いで話す女。自称孫策にあの時の殺気は見る影もない。

「う、ごめんなさい……」

「な、なあ公瑾。当然、わしはお咎めなしじゃよな、よな！」

こっちの女性も相応ビビッてる。

「ほう。こーんな真昼間に、城の目の前で人のことを罵っているくせに、全くお咎めなしですか。宿将と言うのは、大層良いご身分なんですねえ」

「き、聞いておったのか!？」

「ええ! 『いつたい策殿は……』の所から、『……そんなに汗を浮かべて』の所までね!」

つまり、最初っから最後までか。

「す、すまんかった……」

「そしてお前え!！」

「はいいい!？」

俺!？俺なんかした？

「伯符が迷惑をかけたようだな。済まなかった」

さつきとは打って変わって、優しく話しかけてくる女性。ん？伯符って誰だ？

「だが、刃を向けたことは確からしいからな。しばらくは牢に入ってもらおうぞ」

え？全く状況が理解できん……

「えと、貴女は？」

「ああ、悪い、私は周瑜公瑾。孫呉の軍師をやっている。この女性は黄蓋公覆。孫呉の宿将だ。そして、そこで震えてるのが、我らが主、孫策伯符だ」

え？状況は理解できたけど、ヤバくね？俺、孫策様に刃向けちゃったよ！普通は死罪だよ！

「あ、あの、孫策様！申し訳ございません！まさか、貴女様が孫策様だとは知らず、無礼な行為を働いたことを、どうかお許しく下さい！」

反射的に俺は孫策様に謝っていた。謝っておかないと俺の気が済まない。

「私のことはここで切り捨ててもらっても構いません！ですが、私の村などへの報復行為だけはお止めください！」

「そうねえ、どうしようかしら？……よし、決めたわ、貴方を死罪

に処する。日程が決まるまで、お前は牢で自分の罪を悔いている」

殺気が籠った言葉で言う孫策様、その時、俺の人生の終わりが見えた……

04・自称孫策と重罪人（後書き）

どうでもいいんですが、この話で合計文字数が7777文字でした。ちょっと嬉しい。

誤字、脱字、感想、矛盾などがあつたら、報告をよろしくお願いします。

05・賣文鶴、死因は退屈死

あの事件の翌日、私は雪蓮といつも通りに仕事をこなしていた。

今、部屋に居るのは私と雪蓮のみ。

聞こえてくる音は、書類に文字を書き込む音だけ。のはずなんだが……

「ねえ冥琳、そろそろあがって良い？」

「……その科白今日始まって何回目だ？その度に駄目だって言うてるんだが」

ちなみに、私から雪蓮は見えない。間に恐ろしいほどの仕事の山があるからだ。

「お願い冥琳！今回のことは、よーつく反省して、二度と無い様にするから！今回だけは見逃して頂戴！」

「その科白も私がお前に初めて会ったときから何回も聞いたぞ。今日は、溜まってた仕事を全部終わらせるまで帰さんからな」

はあく。雪蓮の仕事をサボる癖はいつまで経っても直らない。

たしかに袁術の傘下に入ってから悩みの種ばかりで気が滅入るのも分かるので、多少は大目に見ていたが……

「よりによって、仮にも君主が農民に泥棒と間違われて捕まるなど、他国の笑いものだぞ？」

さすがに今回だけは許すことも出来そうに無い。

「しょうがないじゃない！酔ってて本気出せなかったんだもん！」

「捕まらなかつたら良いという問題ではない。もし殺していたら、それはそれで悪評が広まるぞ。この辺りは良いかもしれないが、噂とはどんどん悪いほうに脚色されて伝染する物だ。最終的には、『暗殺されかけた孫策を助けた農民を、下劣に笑いながら斬り殺した』なんて風になるかも知れんぞ？」

「下劣につて……確かに最悪ね」

「だからこそ、お前にはちゃんとしてもらいたいんだ。というか、してもらわないと困る」

本当は雪蓮は分かってやっているんだろうが、そこがさらに性質が悪い。

「一応、私なりにはちゃんとしてるつもりんだけどー」

はあ。孫呉の独立は何時になるやら。

「しかし、この一件を誰も見ていなかったと言っるのが救いだな。あの小僧を始末すれば、全て無かったことにできる」

もし見られているのならば、既に噂が広まっている筈だしな。

「その点で言えばさ、死刑にしたのって、私のお手柄じゃない？」

「そうかもしれんが、そもそもお前が街を出歩いていなかったら起

こらなかつた出来事だ。威張るようなことではないぞ」

「むうー、冥琳のバカ。それで、仕事の件なんだけど、穩を呼んできて半分やつてもらおうのつてのは、駄目？」

「穩は今日は休暇だ。今頃は本屋にいるだろうな。祭殿にはお前とは別の部屋で政務に励んでもらっている」

「他に誰か手伝ってくれそうな人は……あ！いい事思いついた！」

悪いが、嫌な予感しかしない。

「この仕事をぜーんぶ、あの、死刑にした子にやらせましょうよ！それなら一件落着だわ！」

「おい雪蓮、それは冗談で言っているんだよな？真面目に言っているのなら私はお前の正気を疑うぞ」

「ど、どうしたのよ冥琳。そんな怖そうな顔してそんな声出して。良い考えだと思わない？仕事は減るし、罰も出来る。これこそ一石二鳥……」

とても嬉しそうな顔をしてそんな声を上げる雪蓮。

「あ、それならいっそのあの子を仲間にしちゃいましょうよ！これなら、仕事は無くなる、罰も無くなる、噂が流れることも防げる、仲間が増える、一石四鳥だわ！」

「……なかなか良い考えかも知れんな」

武力は（酔っている）雪蓮を倒すほどだ。恐らくは祭と同等だろう。

確かに今は即戦力が欲しい。呉の旧臣は各地に散らばったままなので、今動かせるのは私たち四人だけだ。

さらに、これをやらせればどれだけ文官として使えるかも分からない。あまり期待はしていないが。

「やっぱりそうよね！よし、早速行ってくるわ！」

「待て雪蓮！私も行く」

「はあー。暇だなー」

農民から死刑囚へかなりの格下げになった俺。
牢の中でつぶやく一言。

暇。

別に死ぬことは怖くないし、孫策様だから村も大丈夫だろう。結構料理もおいしいし、地面で寝るのも慣れている。

最後に遺書でも書こうと思ったが、よく考えると書く物が無い。血文字で書こうかなーとも考えたが、後の人に迷惑になるので辞めた。

他に何か出来ることは、と考えて、少し前まで腹筋をやっていたが、疲れたのでこれも辞めた。

まあ要するに、かなり暇。

絶対いつか人間が死ぬ理由が退屈になると思う。

おお、これを題材にして一冊本が書けそうだ。

うーん、最初の書き始めはどうしようかなー？

ああ！こんなとき、紙と筆があれば良いのに！来世では絶対本書こう。

そうだな、題名は、『人間の贅沢な死ぬ方法』かな？

うーん。『いちばん大変な死に方』ってのも捨てがたい。

決めた。やっぱり、『賈文鶴、死因は退屈死』ってのにしよう。

それにしても、平和だなー！

自分からしても、あと数日で死ぬ人間の科白とは思えないが。

でも、最後までいい顔見えたかったな。

今はどこで何をしているんだらうか？あいつのことだから、元氣

にやっていると思っけど……

「……おお！なんかしんみりしてた！だめだめ、もっと気分上げな
いとー。」

さて、今度は何をしようかなー

腹筋やったから、今度は腕立てふせにするか。目標は千回だな。

「いち、にいーい、さぁーん……………はっぴゃくきゆう
じゆうきゆう、きゆうひゃく。ふうー、後百回か、頑張るぞー！」

はあー。俺、何やってるんだろ？少し前までは、畑耕してたのに、
今は牢で腕立てって……亡き母さんも泣いてるかな。

「……………きゆうひゃくきゆうじゆうはーち、きゆうひゃくきゆう
じゆうきゆう、せえーん！はあ、終わった」

今はとにかく水浴びしたい、汗だくだく。

畑で働いた後の汗は気持ちいいんだけど、この汗は気持ち悪い。
やっぱり、慣れないことはするもんじゃないな。

次はどうしようか……

「うーん、腹筋、腕立て、と来たら、今度は頭脳系にするか」

頭脳系といえは……なにやろうか？

「おもいつかん、やっぱり俺は脳筋なんだろうか……」

たしかに頭脳ではあいつに敵わなかったしな。俺も脳筋って何回
言われたことか……

「……やめやめ！昔のことを考えるのはやめよう！過去に囚われていては何も成長できないぞ！」

でも、昔のことばかり思い出すってことは、俺は死にたくないかもしれないな。

「誰か、話し相手になってくれないかなー」

「あら？それなら私になってあげるわよ？」

虚構のはずの場所から女の声があった。

びっくりした。ただびっくりした。返事が返ってこないと思ってたもんだから余計にびっくりした。

「どうしたの？その、妖怪と鬼と化け物が一緒に出てきたみたいな顔して？」

妖怪と鬼と化け物って種類のには同じじゃないのか？つと、孫策様と周瑜様だ。

「どつ？元気にしていたかしら？」

俺は孫策様の前に正座をし答える。

「はい、孫策様の与えられたここで自分の罪を理解し、悔い改めることが出来ました。どうか、ご自由に処断なさってください」

「ほう。そんなに死にたいのか。折角生き残れる機会を持ってきてやったと言つのに」

「そうね、戻りましょ冥琳。それじゃ、刑の執行は明日にするから」

「ま、待ってください!」

あわわわ、思わず叫んでしまった。

「……なんだ？私たちに何か用があるのか？」

ええい、こうなればやけくそだ！精一杯足掻いてから死んでやる！

「あの、先ほど周瑜様の仰っていた、生き残れる機会というのを詳しくお話してもらえませんか？」

「どつする雪蓮？」

「良いに決まってるじゃない。何しにここに来たの？」

「そうだな……よし、いいだろう。これからお前に選択肢を二つやる」

選択肢？俺に何かを選ばせるってことか。

「一つは、このまま罰を受け入れ、潔く死ぬ。死体は村に送り届け

「やるから安心しろ」

村に送り届けるって、そんなん送ってこられたら困るよな。

「そして二つ目。これがお前の生き残れる唯一の選択肢だ。その案件は、今後、今回の件を一切口外しないと誓い、我らの仲間になることだ。もちろん、誓いを破った場合はちゃんと死んでもらうから、そのつもりでいるんだな」

死ぬか、仲間になるか。考えることも無く俺は反射的に叫んでいた。

「仲間になります！絶対にこのことを言いません！」

「……即答ね。まだ遣り残した事でもあるのかしら？」

遣り残したこと、か。俺は何で生きたいと思ったんだろうか？やることも無く、ただ畑を耕すだけの存在の俺が……

「まあいい。ちょっと待っている。今すぐ鍵を持ってくるからな」

「それじゃ、先に自己紹介しておくわ。姓名は知ってると思うから省くわ。私の真名は雪蓮。よろしくね」

「え！俺なんか真名を預けてくれるんですか！？」

真名、それは親しい物しか呼んではならない神聖な名。

そんなものを農民であつた俺が呼んで良いものなのか……

「当然よ。だって、仲間になるんでしょう？それなら真名を預けるのは当たり前よ。それとも何？私の真名を受け取るのが嫌なわけ？」

露骨に嫌そつな顔をする孫さ、雪蓮様。

「いえ、雪蓮様、その真名、預からせていただきます！俺は、姓は賈、名は羽、字は文鶴、真名は飛鳥あすかです。未熟者ではありますが、これからよろしく願います！」

「飛鳥ね。孫呉の悲願を果たすため、私に協力して」

「鍵を取ってきたぞ。雪蓮、真名まで預けたのか？」

鍵を開けながら雪蓮様に尋ねる。器用だな……

雪蓮様は当然、と首を振る。

「ならば私も預けなければな。周瑜公瑾、真名は冥琳だ。よろしく頼むぞ」

「飛鳥です！よろしく願います！」

雪蓮様に冥琳様。よし、覚えたぞ！

「残りの将には、後々会わせるわ。とりあえず、部屋に行きなさい」

部屋に案内され、ベッドに横たわる。

「はあー。これから大変そうだな」

机の上においてある大量の仕事の山を見ながらつぶやく。

俺の、頭脳との戦いが始まる。

05・賣文鶴、死因は退屈死（後書き）

誤字、脱字、感想、矛盾等があれば、よろしくお願いします。

06・おサボリ君主と方向音痴

俺が呉の仲間になってから約一週間。

死刑の危機から脱し、やっと平和に暮らせると思われたが、今度は過労死の恐怖に晒されていた。

「め、冥琳さん。そろそろ寝たいんですけど……?」

「これが全部終わったらいくらでも寝てくれ」

ただ今仕事中である。四日前から。

俺の前には仕事の山、山、山。その所為で冥琳さんが見えない。

「あ、あの、俺もう四日も寝てないんですけど……いいかげんに寝ないと俺死んじゃいますよ?」

「安心しろ。私も四日徹夜したことはあるが死にはしなかったぞ」

そついう問題じゃない気が……

「ていうか、四日も仕事やってるって、どんだけ溜まってるとですか?」

この量は普通に考えておかしい。どんな大規模な戦争が起こったんだよ。ってくらいに多い。」

「八割は雪蓮がサボって溜まった物だ。今この瞬間もどつかで遊んでるだろうから、どんどん溜まっていくぞ。さらに、時折袁術からも追加で回ってくるからな」

……仕える君主間違ったな。

扉の外からどたとたと走る音が聞こえる。

「ねえ飛鳥！今から街に遊びに行かないかしら？」

扉が開き、雪蓮様が現れ、突拍子も無いことが口から飛び出す。

「……雪蓮。私たちが今何をやっているか見えないのか？」

「あれ？め、冥琳いたの？」

しまった。と聞こえてきそつな表情をする雪蓮様。

「ああ。私も飛鳥もお前のサボった仕事をやっているんだ。飛鳥と遊びに行きたいんだったらお前も手伝え」

「あ！今から祭と兵の鍛錬してこなきゃ！それじゃ、またね！」

風のように速く部屋から飛び出て行く雪蓮様。ああ、もう辞めた
い。

「……早くやりましょうか」

「……そうだな」

黙々と仕事を続ける。お腹空いた。徹夜しだしてからは、ぱぱつと食える肉まんばつかだっただけで、そろそろガツツリ食べたいな。

「ふう……私は食休みをとってくる。飛鳥も何か食べてきていいぞ」

「了解です。ふああ〜ねむたい」

大きなあくびをしながら立ち上がる。

さて、今日は何を食べようか？ハチミツラーメンにでも手を出してみようかな？

むむむ、なかなか決まらないぞ。そういえば……

「冥琳さんは今日なに食べるつもりですか？」

「ん？私か、そうだな、今日は街で済ませようと思っている」

たまにはな。と笑う冥琳さん。

「それなら、俺も付いて行って良いですか？」

自分で決められないなら、他人に決めてもらうことにしよう。

「飛鳥がか？構わないぞ。ほら、時間は一秒でも惜しい。早く行くぞ」

「うーん、相変わらず八チミツだらけ」

もしここが雪蓮様の領地になったら、まずはこれをどうにかしなきゃならないよな。

冥琳さんは無言で歩みを続ける。決めた店があるのかな？

てか、早ッ。人ごみの中をかき分けながら追いかける。

「め、冥琳さーん！」

俺の言葉が聞こえていないようで、そのままずんずん行ってしまった。

冥琳さんを見失った……

「どうしよう……」

表通りを外れてしまったようで、ここがどこだか見当が付かない。

方向音痴なわけでは無いのだが、ここに来て約一週間、ほとんどが屋内で仕事だったため、この地理は全くと言って良いほど分からない。

地図を眺めたりはしたのだが、具体的にどこに何があるかは分からない。

「何か食べる以前に城へ帰れないかも……」

とりあえず自分が来たと思われる道に戻るとしよう。

……さっきから同じ所をぐるぐる回っている気がする。

これは本格的にやばいんじゃないか？お腹も空いたし、眠いし、足痛いし、今誰かに襲われたら死ぬる自信がある。丸腰だし。

まさかこの年で迷子になるとは思わなかった。

まず、何でも良いから腹に入りたいな。それだけでかなりよくなるはず。

えーっと、どこかに……………無いな。この辺は居住区みたいだ。

しょうがないので、手当たり次第に歩くとしよう。

すでに日は暮れようとしているが、いまだにこの迷宮から抜け出せない。

はぁー。ここが墓場になるとは。せめて最後にお腹いっぱいおいしい物が食べたい。

道の隅っこで足を腕で抱えながら座り、夕日を見ながらたそがれる。

「まさか、こんな所で餓死することになるとは」

今となってはどうでも良いけど、せめて死因は退屈死が良かったな。

「あれ？飛鳥じゃない、こんな所で何をしてるの？」

不意に声をかけられ、声のしたほうに振り向くと、そこには雪蓮様がいた。

「え？雪蓮様、ですか？ほんとに？」

「何言ってるのよ、私が他の誰かに見えるわけ？」

うそ、マジで？これ助かるんじゃない？

「それでどうしたの？この辺は民家しかないから、あなたに用がある場所とは思えないんだけど」

「えーっですすね、冥琳さんにご飯を食べに街に出てきたんですけど、途中で見失ってしまって、迷子に……」

「へえー。ってことは、お昼からずっとここに居たの？」

「はい。そういえば、雪蓮様はどうしてここに？」

「あ、私？ちよっとおばあちゃんの荷物が重そうだったから、ここまで持ってきてあげたり、その他もろもろお手伝いしてた」

へ？おばあちゃん？誰ですか？

「……もしかして、仕事をサボって毎日そんなことをしてるんですか？」

「そんなことって、大事なことよ？」

「……まあいいです。俺一人じゃ帰れないんですから、案内をお願い

いしますね」

「そうか、仕事をやらない雪蓮様は、こういふところにいると頑張ってたんだ。そう考えると、あんまり憎めないよな。」

「分かったわ、それじゃ早く帰りましょ」

雪蓮様が俺の数歩先を歩き、俺がそれを追いかける。

既に日は暮れ、月明かりを頼りに街を歩く。

「そついえば雪蓮様、お願いがあるんですけど」

「なに？」

「一度村に帰りたいんですけど良いですか？主な道具とか武器はあつちに置きっぱなしなんですよ」

「いいわよ。最初から一度は村に帰ってもらつつもりだったからね」

「そつなんですか？」

「ええ。つと着いたわよ？」

「こんなに近かったのか……もっと勉強しよう。」

「おや？策殿と、あの時の小僧ではないか。ちょうどいい、ちょうど付き合え」

廊下を歩いていると黄蓋さんが現れた。どうやら酔っている様子だ。

「祭なにになに？お酒？」

雪蓮様はお酒のおいがしたのを察知すると早く行けと言わんばかりに俺の背中を押してくる。

案内された場所は中庭。月明かりのなかでお酒を飲んでいるみたいだ。

そこにいたのは、冥琳さんに、陸遜さん。

「おお、飛鳥。無事だったか。それと、雪蓮も一緒か。良い機会だな。飛鳥、皆に自己紹介をしておけ」

「その子が雪蓮様がべた褒めだった新しい仲間ですか？」

陸遜さんとは時々すれ違ったりするんだが、話したりするのは初めてだ。こんなにほんのりした人だったんだな。

冥琳さんが言うには、呉の未来を担う逸材って言ってた。それにしたしか、本が好きなんだよな。

「ええ！祭と同じくらい強いのよ！」

雪蓮様は既にお酒を飲みだしている。

「ほお。あの時見た際は何も感じんかったが、そうなのか？一度手
合わせを願いたいな」

「手合わせはちょっと遠慮したいですね。それじゃ皆さん、新しく
仲間になりました、賈羽文鶴、真名は飛鳥です。よろしく願いま
す」

「おお！わしは祭じゃ！手合わせを含めてよろしく頼むぞ！」

「私は穩です。これからお願いしますね」

祭さんに、穩さん。よし！覚えたぞ！

「それなら、今日は飛鳥が仲間になった記念の酒宴にしましょうよ
！」

酔いが回った様子の雪蓮様が叫ぶ。

「そうだな。最近仕事詰めだったからこういった休養も必要だろ
う」

冥琳さんも賛成の意を示す。

「わしたちは既に飲んどるがな！」

「そうですね」

祭さん、穩さんも笑う。

「それじゃ、決定！ほらほら、飲んで飲んで！」

寝不足、空腹、この状態で酒なんか飲んだら吐きそうだな。飲むけど。

雪蓮様に促され器を口に運ぶ。……うぶ、眩暈がする。どんだけきついんだこれ。

「おい雪蓮、その酒はお前専用のやつだろ？飛鳥に飲ませたら倒れるんじゃないか？」

「だいじょーぶだいじょーぶ！ね、飛鳥！」

え？やべ、吐きそう……

それでも尚、酒でいっぱいの器を押し付けてくる雪蓮様。この酔っ払いめ！

しょうがないので飲む。眩暈がする。飲む。眩暈がする。

「うぶ、もう無理………」

「だらっしないのおー！ほれ策！わしにもよこせ！」

お前等みたいな酒飲みと、酒なんか滅多に飲めない元農民の俺と一緒にすんじゃないかええ！

「ふふ、大丈夫か？」

一応心配してくれる冥琳さん。でも、顔が全く心配してる顔じゃ

ねえ！

「だいじよばない……吐きそう」

木製の机の上へ倒れこむ。

あ、意識が遠のく……

そこからの記憶を俺は持っていないが、気がつけば部屋に居たので冥琳さん辺りが運んでくれたのだろう。

「はあー。疲れた。気持ち悪い」

仕事を死にそうになるまでやらされ、迷子になり、酒を飲まされて倒れるという、最悪の一日だった……

06・おサボリ君主と方向音痴（後書き）

誤字、脱字、感想、おかしい所があれば、よろしく願います。

呉の皆と真名を交換して二日。俺は第二の故郷である丹陽の村への帰路についていた。

「ふうー。ちょっと休もう。時間はたっぷりある……わけではないけど」

俺に与えられた休暇は一週間。行って、一日滞在して、帰ってきたら期限ギリギリだろう。

「ん？……なんだあれ？」

小高い丘で休んでいたら、異様な光景が目に入った。

俺の視線の先では、人が何かに群がっていた。それだけなら普通かもしれないけど、時折人が空高く飛ばされているのを見ると、どう考えてもおかしいだろう。

ん？怒声が聞こえるな。ってことは誰か戦っているのか？

ここからではよく見えない。結構目には自信あるんだがな。唯一分かるのは黄色い布を巻いていることだけだ。

どっちにしても数がかかり多い。もし戦っているのならば恐らく賊だろうから、助太刀に行ったほうがよさそうだ。

「よし、突っ込むぞ！」

俺が眺めていた丘から馬に乗り駆け下りる。

突然の不意打ちにたじろいだ賊（仮）数名は俺を避け、数名は馬に踏み潰された。

戦っていたのは女性だった。

「ッ！あなたが何者かは存じ上げぬが、しばし力を貸してもらえな
いだろうか？」

女性が馬に跨る俺に話しかけてきた。

「最初からそのつもりだよ！」

武器庫から拝借した剣を抜き、馬から飛び降りる。

「な、なんだ？こいつの仲間か？」

「ひい、こんな化け物が二人に増えやがった！」

賊（仮）がざわめく。ていうか、もう（仮）取ってもいいよね？

「はあ！」

油断していた賊を真つ二つに斬り裂く。

「ひい！」

「だ、だめだ！敵いやしねえ！」

残っていたのは三十人ほどだが、仲間が真つ二つになったのを見て、われ先にと逃げていった。

「ふう。これで終わりか」

周りを見たところ、一人残らず逃げていったようだ。

つとさっきの女性は……いた。

「大丈夫だった？」

「助かりましたぞ。私は趙雲と言つ者です。名前をお聞きしてもよろしいでしょうか」

趙雲？どっかで聞いたことがあるんだけど……

「俺？俺は賈羽っていうんだ」

「賈羽殿……お願いしたいことがあるのですが」

「良いけど、何？」

「先程戦っていた賊どもは、この先の洞窟を拠点にしているのですが、先日私が眠っている間を見計らい、その賊に荷物を盗まれてしまったのです。その中には武器も含まれていまして、どうも私一人では心許なく、貴方に手伝ってもらいたいのです」

いま趙雲さんの持っている武器は、刃渡りが短い脇差のような剣だ。ていうか、それで人を飛ばすってどれだけ力強いんだよ……

時間的に余裕は無いが、まあ、今日中に片付ければ間に合うだろう。

「いいですよ。乗り掛かった船です」

「感謝いたします」

「それで？その洞窟ってのは？」

「ここから二里ほどです」

「それじゃ、早く行こう」

白馬の後ろに趙雲さんに乗せ、その場所まで走る。

「ところで賈羽殿。貴方の武はかなりの物とお見受けしましたが」

「うーん、そうでもないよ。別に師が居るわけじゃないし、自分で鍛えたんだからね」

「それでは、これが片付いた後に一度手合わせを願いたいのですが」
むう、なんでこう強い人は手合わせばかりしようとするかな？

「……悪いんだけど、用事があるから無理かな？それを終わらしたらずくに帰らなきゃならないし」

「帰る？一体どこに帰るのですか？」

「えつとね、俺は孫策様に仕えてるんだよ。それで故郷へ帰るために休暇を貰ったんだけど、それが短くてね」

「おお！貴方は孫策様に仕えているのですか。それでは、縁があったら共に戦うことになるかも知れませぬな」

「どういづこと？」

「今私は主探しの旅をしているのですよ。その候補の中に、孫策様も含まれているのです」

「はは！俺は趙雲さんとは戦いたくないよ」

そんなことを話している内に、洞窟といえなくも無い岩の大きな亀裂が見えてきた。

「趙雲さん。あれかな？」

「恐らくそうです。行きましょう」

「待って、その前に、やっておく事がある。少しでも負担を減らしたいからね。悪いんだけど、これっくらいの木の棒を集めてくれな
いかな？」

「何に使うのですか？」

「それは、使うときのお楽しみってことで」

木の棒に、持ち合わせた布を巻きつけ、食用だった油を染み込ませる。

その布に火をつけ即席の松明を作る。

見つからない様に洞窟の近くに隠れ、機を計る。

良い具合に日が暮れてきた。これなら洞窟から出てきたとき丁度夕日が目に入り、戦い所ではなくなる筈。

「よし、放り込め！」

その合図で松明を洞窟の中に放り込む。これは焼き殺すためではなく、誰かが攻めてきたという事実で、混乱するのを促すためだ。

「う、うわあああああ！」

「なんだ！なにがおこった！」

「敵だ！敵が攻めてきたんだ！」

思惑通り、敵は武器も持たずに洞窟から飛び出てくる。

「く！な、なんだ、眩しい！」

と、これも思惑通り、夕日に目がやられ、逃げることもままならない。

「ちよつと眠っててくれよ！」

さすがにこの状態の賊どもを殺戮するのは気が引けるので、殴ったり蹴ったりで気絶させる。

趙雲さんも俺と同じ戦法でどんどん賊を片していく。

数刻経つ頃には全て片付いていた。

「ふう。お疲れ様。武器は取り返せた？」

「ええ、おかげさまで」

「それじゃ、気をつけてね。もう賊なんかには武器を奪われることが無いように」

はあ。ちょっと寄り道しすぎたかな？

このまま全速力で走ってもらったら明日の夜には到着するだろうか？

俺はすぐにそこを立ち去り、再び故郷を目指し走り出した。

07・Help me 買羽(後書き)

誤字、脱字、感想などありましたら、コメントよろしくお願ひします。

08・主人公は弓の的（前書き）

二日ほど熱でダウンしておりました。
今日から復活です。

08・主人公は弓的

俺は、ときどき十年前から同じ夢を見る。

それも決まって『ある』ことが在った日の夜に。

『ある』ことと言つのは、良いことではない。寧ろ最悪だ。

その夢と言つのも、良い夢ではない。悪夢だ。

『ある』ことは、俺が殴られたり、蹴られたりすること。その日の夜に、最悪な悪夢を見る。

その夢は、部屋の中で延々と俺らしき人物が殴られる、蹴られる、と言つ光景を、窓の外から見せられる。

最後には、決まって俺らしき人物がぴくりとも動かなくなる……つまり、死ぬ。

そこで、俺は目が覚める。大抵は、汗をありえないほどかいた状態、最悪の気分だ。

だから、俺は、夢が嫌いだ。たしかに良い夢も見る。だが、その暴行の光景は、かつての俺に重なるようで……

今日、この日も最悪の気分で目が覚めた……

「……………はあ。またか……………」

俺は例に漏れず、最悪な夢を見て、最悪な状態で目を覚ました。
しかし、俺に何があったのだろう？俺の記憶の限りでは、『ある』
ことをされた覚えはない。

……天井に違和感を感じ、視線を部屋のほうに向ける。

「……ここどこだ？俺の部屋じゃないよな。こんな色々と装飾無い
し」

気を取り直し、状況把握に努める。

俺が眠っていた寝台も、よく見ると結構な装飾が施されている。

部屋も庶民……つまり俺……みたいな人が住めるようなところじ
やない。かなり豪華だ。

それこそどこかの豪族か、太守みたいな人じゃないと。

「まずは色々と探検を……い、痛てててて！」

寝台から降りようと体を動かすと、体中に激痛が走る。

痛みがした所を見てみると、包帯が惜しげもなく大量にまかれ、
所々から血が滲み出していた。

ほ、本当に何があったんだ？こんな大怪我をした覚えも無いんだ
が……

どちらにしても、動き回るのは無理そうだ。

「痛てて……ん？あの子は？」

さつきは気がつかなかったが、黄色い高そうな服を来た可愛い金髪の子が、部屋の隅っこで座り、眠っていた。

そしてほのかに香るハチミツの香り。

金髪の子には悪いが、起きてもらわないと状況が分からない。期日ギリギリだったから、それも気になる。

「あー、起きてくださいませんか？」

「すうー、すうー」

全く起きる様子はない。

だが、寝息を立てるごとに頭が動く様子がむちゃくちゃ可愛い。

もう少しこのままでも良いかも……

俺が恍惚に浸っていると、扉の外から足音が聞こえた。

扉が開き、俺と目が会う、が俺には目もくれずに金髪の女の子の傍に寄る。

「お嬢様、起きてください」

金髪の子の肩を揺すり起こそうとする。

「むにゃむにゃ、七乃かぁ？妾はまだ眠いから、後もう少し……」

「……拾ってきた子も起きましたよ」

「それは本当か！」

びっくりした。ぼそつと何か言ったかと思うと、すごい速さで立ち上がった。

拾ってきた子ってのは、たぶん俺だろうな……

「あー、ここどこですか？」

本当は真っ先に聞きたかった質問を口にする。

「ここは南陽、妾の城じゃ！」

金髪つ子が偉そうに言う。いや、もしかしたら本当に偉いかもしれないけど。

しかし、南陽か。城に戻るまでそう遠くも無いな。

「えーっと、何で俺ここにいるんですか？」

「何も覚えてないんですか？ 私たちは貴方がボロボロで死にそうだったんで、お嬢様が此処に連れてきたんですよ」

「じゃあ、なんで俺ボロボロになってたんですか？」

全く記憶が無い。ていうか、そんな大事なことから覚えとけよ……俺。

「そ、それはじゃな、妾達が賊の討伐に向かった所で、賊にボロボロのズタズタにやられておったんじゃない」

「……マジで？」

「う、うむ！ その通りじゃ！」

その割には目が泳いでるし、言葉もしどろもどろになっている。それに自分で言うのもアレだけど、俺が賊如きにやられるわけ無い。

「……ウソですね」

「な、何で分かったんじゃ!?!」

うわー。自分から自白したよ。自白と言うより自爆？

「……なんで俺ボロボロのズタズタだったんですか？」

「え、えーっと、本当は妾が賊に斬られそうになったところをお主が助けて、代わりに傷を負ってしまったんじゃ……」

金髪つ子が恥ずかしそうに言う。

「その後に拠点に連れ去られた貴方は殴る、蹴るなどの暴行を加えられた上、賊どもに弓の的にされると言う暴虐非道な扱いを受けたあと、ほぼ瀕死の状態で拠点に放り出されていたのを私達が見つけたんです」

ゆ、弓の的っすか……

「貴方が起きるまでお嬢様はずーっと貴方の看病をしてたんですよ」

金髪っ子が顔を赤らめる。

「と、とここで！お主の名はなんと云うのだ？」

「あ、俺は賈羽文鶴と申します。失礼ですが、貴女方は？」

「妾は袁術じゃー！」

な、袁術、だと……？南陽って、そういうことか！しかし、こんな小っちゃくて可愛い子だったんだな……

「私は張勳ですよ」

「早速じゃが、お主に褒美をやらねばな！」

褒美か……雪蓮様の城に連れて行ってくれるが一番良いな。

「それでは、お主を妾の家来にしてやるぞ！」

「え？……今、なんて仰いました？」

「ん？お前を妾の家来にするといったのじゃ」

……おいおい、マジかよ！ここまで思考回路がぶっ飛んでる子だ
つたとは……ハチミツ街見れば分かるけど……

「えーと、申し訳ないんですけど、俺は孫策様に仕えてるんでその
褒美は受け取れません」

「な、なんじゃと！お主は孫策の物なのか！」

いや、物っていうか、人だし……

「それなら、詳しく俺に何があったのか話してくれませんか？俺は
故郷の村から帰るところだったんですけど、そこからの記憶が無い
んです」

「それを話せば妾の物になってくれるのか！？」

いや、物じゃないってば。俺は人だよ？

「……たぶん」

ああ、無責任な俺を許してくれ！

「それでは七乃！何があったのか話してやるのじゃ」

こうして張勳は語りだした……

08・主人公は弓的（後書き）

誤字、脱字、この展開マジありえねえわ、などありましたら、コメントよろしくお願いします。

09・やっぱり毒草は怖いらしい(前書き)

やっぱり主人公だけだと説明文が多くなってしまいますね。

09・やっぱり毒草は怖いらしい

五日前……

「はあー。間に合うと良いけど……」

趙雲さんのお手伝いをした後、俺は村へ馬を走らせていた。だが、全速力で村に向かって走っているんだが一向に着かない。その途中で遭遇した賊どもを屠りながら移動するので、さらに時間がかかる。

「お腹減った……」

持ってきたお金はすぐに底をついた。ていうか、財布無くした。なので、趙雲さんと分かれてから何も口にしていない。本来なら動物でも狩れば良いんだろうけど、俺は料理がからつきしなので狩ったとしても食べようが無い。生で食べたくないし。何で俺こんなに調味料持ってきたんだろう……

俺の料理は殺人兵器（幼馴染談）らしいから、料理は無理として、他に何か食べられる物、この際腹を満たせるなら何でも良いけど……

「きのことか、木の実かな？」

「だけど、毒とかあったら怖いから、あまり食べたくない。しかし、何で俺が倒した賊は金を一銭も持ってないんだよ……」

「そういえば、あいつら全員黄色い布を着けてた。行商のおじさんもだれか指導者がいるとか言ってたし、賊が組織的に動いてるのかもしれないな。」

「そんなことを考えながらも馬を走らせる。そろそろ日も暮れようかというところだ。」

「すると前方に、野草がたくさん生えているのを発見した。馬も休ませなきゃならないし、一度休憩するかな。」

「さて、これ食べられるかな？明らかに毒々しいのは見当たらないけど。」

「白馬は躊躇することも無くもしましやと食べ始める。」

「馬が食べられるなら俺が食べても大丈夫かな？」

「それじゃ……いただきます」

「綺麗な花が咲いているのを選んで、ぶちつと葉をちぎり、口に放り込む。」

「……苦く、ピリツとしていてお世辞にも美味しいとはいえない。」

だが、腹が減つてるときはどんなものでも食べられるのは俺が身をもって実証済みだ。

「もしかもしゃ……喉が渴いてきたな。近くに川は……無さそうだな」

しょうがない。ここは我慢しよう。

しかし、何が悲しくて馬と一緒に草をもしかもしゃ食べにゃならんのか……

「さてと、そろそろ行こうかな」と

腹にたっぷりと野草を詰め込んだ俺は、再び村を目指して走り出した。

再び前方に野草の群と、古びた立て札が掲げているを見つける。

「ん？何が書いてあるんだ？えーっと『警告！この草は、人間が食べてしばらくすると体が痺れ、酷い時には死にます！絶対に口にしないでください！』……なんだって？」

野草のほうに目をやると、先程口にした草がところ狭しと生え並んでいる。

おいおい、あっちのほうにも立て札立てとけよ！俺食べちゃった

じゃん！

立て札には、『人間が食べると』とあったから、馬は大丈夫なんだろう。くそ、馬に騙された……

しばらくつてのが、具体的にどれくらいなのかは分からないが、少しは安静にしておこう。

そういえば、村のみんなへのお土産の中に『大陸の野草大図鑑』つてのがあった気がする。

近くにあった木にもたれ、荷物をあさる。

「えーと……あった。なになに、この野草は朝顔の一種で、症状は……」
『喉が渴き、吐き気を催し、体が痺れ、最終的には死に至る可能性がある』……「なんだって？」

他には、心臓の痛み、前後数日の記憶喪失などが症状に挙げられるらしい。

マジかよ……喉が乾いたのは毒の初期症状だったってことか。てことは近いうちに吐き気とかも……

「う、こんなときに……」

もたれていた木の後ろのほうから複数の足音が聞こえる。

「コッッ！」

風切り音が聞こえた。足音の主は賊のようだ。大方、俺の馬を目掛けて矢を放ったのだろう。矢は、俺のすぐ横の地面にめり込む。へたくそだな。

「あれ？この矢って、俺のじゃん」

地面に刺さった矢を抜き、鏃の方を見て呟く。確かに自分の矢だ。俺のは特別製で、鏃が螺旋状になっている。（いわゆるドリルの先端）

これは一番貫通性能が高いと自分で試して作った物で、たぶんこの世で俺しか持っていない。

ただ、値段が恐ろしいほど高いので、三本しか作っていないが……なんで賊がこれを持っているのだろう？

「よいしょっと、これはちょっと確かめなきゃな」

体の異変を訴えてくる体を起こし、足音がしたほうを見る。

案の定、黄色い布を頭につけた三人組、今回はのっぽ、ちっこいの、でかいのと呼ぶことにしよう。のっぽは、俺の弓を持っていた。

「やっぱり馬だけじゃなくて持ち主もひっついてたか。おい兄ちゃ

ん、とつと馬を残してこの世からオサラバしちまいな」

下種な笑いを浮かべながらのつぽが弓を構える。俺はそいつが矢を放つより速く剣を投げる。

ビュン！

矢とは少し違う風切り音を残し、剣はのつぽの足に突き刺さる。のつぽは悲痛な声をあげ、そこに倒れこむ。仲間が驚き、怯む、でかいのは、後ずさりをして倒れこんだ。

その隙を見逃さず、足で地面を蹴り一気に距離を詰める。

「ア、アニキ！う、うわぁ…く、来るんじゃないねえ！」

ちっこいのは剣を抜き、俺を斬ろうと上から叩きつける。

「はぁ。隙多すぎ」

それを人差し指と中指で挟み、俺の後ろに吹き飛ばす。それと同時に空いているほうの手を使い、肘で鳩尾を突く。

剣は俺の後方の地面に刺さり、ちっこいのは奇声を上げた後気絶

した。

「し、失礼したんだな！」

でかいのは、左にのっぽ、右にちっこいのを抱え、俺に背を向け逃げようとする。

いつもなら逃がしても良いんだけど、今回はそうにも行かない。

「悪い。ちょっと聞きたいことがあるから」

俺はでかいのの肩を掴み、地面に叩き付けた。でかいのは目を回し気絶した。

「あ、気絶させちゃ駄目だったな」

三人組は縄でぐるぐる巻きにして放置。俺は弓と矢を回収しに行った。

「やっぱりそうだ。さっき飛んできたのを併せて合計三本の矢と、俺の弓『斑鳩』だ」

痛んでる所は無いか調べる。ふむ、どうやら大丈夫なようだ。

三人組の所まで戻る。三人のうち一番軽くやったでかいのは目を覚ましていた。

「おはよう諸君。まあ、諸君じゃないけど、ちょっと聞きたいことがあるんだけど良いかな？」

「わ、分かったんだな。それを言ったらすぐに解放するんだな」

「ん、いいよ。それじゃ一つ目の質問。お前等は黄色い布を着けるけど、これには何か意味があるの？」

「こ、これは……」

でかいのが言い淀むので、俺は弓の刃先を笑顔で突きつける。

「えと、その……」

なお言おうとしないので、こちらから聞いてみることにした。

「仲間の印だろ？」

そういうと、びくっと、体を震わせ、汗をだらだらとかきだした。当たり前だな。

「まあいいや。んじゃ、次の質問。これはどこで手に入れたの？」

「そ、それは、襲った村に良い弓があったから、奪ってきたんだな」

……こいつの言ったことが本当なら、俺の村が襲われたことになる。こいつを殺したい衝動に駆られたが、必死で抑える。

「……分かった。それじゃ、最後の質問。お金と食料持ってる？」

三人組は縄を解かずそのまま林の中で放置しておいた。別れ際に、『次俺の前に出てきたら殺す』とっておいたので、二度と会うことはないだろう。

お金と食料を持って、村を目指す。

「ん？討伐軍が来てるのか。まだ戦ってるみたいだな」

村の中からは、金属と金属がぶつかり合う音、怒声、断末魔の音が聞こえてくる。

「う、やべ……」

少し前から感じていた吐き気と、手足の痺れが顕著に現れる。悲鳴を上げる体に鞭打って、村の中へ足を踏み入れる。

「ッ！あれは……」

俺の目に入ったのは、火の海の中で、鎧をつけた男達と、着の身のままの男達が戦っている光景だった。

一人、鎧の男が俺に気づいて、近づいてくる。

「お前は……ここの村の住民だな。大丈夫か？……此処を出て、東に半里ほどに味方の本陣がある。そこに向かえ」

俺を眺めた後、そう一息で言い、戦いに戻っていった。

「……分かりました」

毒に犯されている俺が何か出来るとは思えないので、素直に行くことにした。

「くそ！もつと早く来ていたら……」

悔しさを噛み締めながら、馬に乗り本陣を目指す。

「……あれだな」

どうやら本陣も、攻撃を受けているようだ。
馬を止め、弓を引き絞り、普通の矢を賊めがけて放つ。敵の集団の中から一つ声上がる。

再び馬を走らせ、本陣に向かう。

「あ、此処の住民の方ですか。あちらの天幕へ向かってください」

本陣に入ると、將軍らしき女性が天幕を指差しながら言ってきた。

「……大丈夫です……」

やばい。手足が痺れて、まともに歩けない。吐きそう……

「大將軍！危険ですから袁術様を連れて後方へ下がってください！」

声がしたほうを見ると、金髪の女の子が、悠々と座りながら何かを言っているのが見えた。

賊が、陣の中に入り込んで来ていた。

「七乃！八チミツ水おかわりなのじゃ！」

意識が朦朧としてきた。

「お嬢様！危ないですから下がりますよ！八千ミツ水は後にしてください！」

何を言っているのかは分からなかったが、ただ危険だということ
は分かった。

ふと左を見ると、立ち上がっていたさっきの金髪の女の子の後ろ
から、賊が斬りかかっていた。

どうやって体を動かしたかも分からない。もしかしたら倒れただ
けかもしれないし、誰かに押されたのかもしれない。

でも結果として、俺はその子を庇う形で体を斬られていた。

「くそ！なんだこいつ、袁術を殺せる絶好の機会だったのに！く、
野郎ども、一度退くぞ！」

体が空中に浮くような感じがした。金髪の子が涙を浮かべながら
何かを叫んでいるように見えた。見間違いだろつか？

そこで、俺の意識は途切れた……………

09・やつぱ毒草は怖いらしい(後書き)

誤字、脱字、感想、などなどありましたら、コメントよろしく願
いします。

10・俺にはまだ、帰れるところがあるんだ……（前書き）

話の進行が遅い気がします。

たぶん次回で黄巾党討伐に入ります。

10・俺にはまだ、帰れるところがあるんだ……

現在……

「……思い出した」

張勳さんが話してくれたのは、俺が賊に拉致された後の話だったが、それをきっかけにして毒草で消えていた記憶を思い出した。

「……それで、傷だらけの貴方を私がここに運んだ。てな感じですが、分かりましたか？」

「よし！それなら、家来になるのじゃな？」

「話は分かりはしましたが、やっぱり家来になるってのは……」

「ここで頷いてしまったら、雪蓮様に殺されるよな。うん、絶対殺されるね。」

でも、この大怪我で城に戻ることは出来なそうだしな……

「むむむ、こやつは嘘つきなのじゃー！」

「困りましたねー。既に黄蓋さんと同じくらいの強さを持つ将とし

て発表しちゃったんですけど……」

袁術ちゃんがほつぺたを膨らませながら俺を指差し、張勳さんがぼそつと何かを言った。

……廊下からどたと走る音が聞こえる。この足音は……

「ちょっと失礼するわよ」

やっぱり、雪蓮様だった。冥琳さん、祭さん、穂さんも一緒だ。

「む、朝っぱらからどうしたのじゃ孫策。妾は今忙しいのじゃ。用があるなら後にしてたも」

「そう？でも私は早急に貴女とお話しなきゃならないのよ」

あ、あれ？なんか雪蓮様が怒ってるぞ。俺なんかやったっけ？

「袁術、お前の所に最近新しく将が仕えた様だが、そいつを見せてもらえないだろうか？」

あ、あれれ？冥琳さんも怒ってる？俺何もしてないよね？

「ほれ、わし並に強いのだろう？一度戦ってみたいから早く出さんかい」

あれれれー？祭さんもご立腹？あ、俺が期日守らなかったから怒ってるのかも！

「早くしてくださいよー。私まだ起きたばっかなんですから」

穩さんは……うん。怒ってるね。声にいつものほわほわ感が無い。

こ、これはヤバイ！早急にお謝りしないと……

「しえ、雪蓮様あー！そして皆さん、本当に申し訳ございませんでしたあー！」

とりあえず傷が痛まないように頭をたれる。こ、これは打ち首とかなるんじゃないか？

と思つてたが、孫呉一行は目を丸くして俺のほうを見ていた。

「え？何で飛鳥が謝ってるの？」

「私達が追求しているのは袁術なんだが……」

四人とも呆れ顔で俺のほうを見る。

「え？俺を責めてたんじゃ無いんですか？」

「何で飛鳥のことを責めなきゃならないのよ」

雪蓮様によると、袁術ちゃんは俺を勝手に袁家の将として取り立てていたらしい。

そのことを聞きにここに来ていたそうだ。

「まあいいわ。それで袁術。貴女、私の仲間を勝手に自分の物にしようとしてたでしょう」

だから、物じゃないって、人だって。

「ぎっくう！そ、そんなことは無いぞ？わ、妾には何を言っておるのか分からんな」

「ごまかそうとしてもそうは行かんぞ。証拠は拳がってるんだ。そこにいる飛鳥が証拠だ」

「てことで、連れて帰るぞ」

祭さんに背負われた俺は、涙目の袁術ちゃんに一言礼をして、雪蓮様の居城へ帰っていった……

「飛鳥、それで？」

「え？それでって？なんですか？」

城に帰った俺は、絶対安静ということで、自室でしばらく休むことになった。

毎日が暇なので、遊びに来てくれるのはとっても嬉しいんだが……

雪蓮様を匿っていた事がばれて冥琳さんに怒られるのは自分です。

勘弁してください。

「ということで雪蓮様は、毎日ここに避難しに来る。今はお土産ど
ーのこーの話だ。」

「え？里帰りしたんだから、お土産は無いの？」

「お土産って、普通逆じゃありません？ていうか、賊にボコボコに
された俺にそんな余裕はありません」

ちなみに、弓はきちんと城に届けてあった。ありがとう張勳さん。

「えー？楽しみにしてたのにー。飛鳥つてば、帰ったら二日間寝込
んじゃうんだもん。その間冥琳に叱られっ放しだったわ」

「それは自業自得な気が……あ、そういえば俺がいない間に何か変
わったことありましたか？」

「えーつとね……この前朝廷から使者が来たのよ」

「ええ！？それかなり重要なことじゃないんですか!？」

「……声でかいわよ。まだ傷が完治してないんだから、無茶しない
の」

くうう。腹に染みる……気をつけよ……

「それで、使者が来た目的はなんだったんですか？」

「ん？えつとね、最近賊の活動が活発になってるじゃない？それで、諸侯に討伐命令を下したってわけ」

見舞いの品として持ってきたはずのお菓子も雪蓮様がパクパク食べながら答える。

しかし、賊くらい自分達で討伐できないのかよ……漢王朝も終わりが見えてきたかな。

「まあ、私達は袁術の指令がないと動けないから、特にすることもないのよ」

「それは……そうですね」

「あ、それとね、曹操ってしってる？」

「曹操と言えば、最近急激に勢力を伸ばしてる人ですよ。その人がどうかしたんですか？」

「そこにね、天の御遣いが落ちたんだって。私はどうでも良いんだけどね」

「俺もどうでも良いですね。御遣いが一人二人落ちたところで、世の中が激変するわけでもありませんし」

「そうよねー。ただ、神輿としては使えるから、ちょっと惜しかった気もするけどね」

天の御遣いねえ。仮にそれが本物だとしたら、天は曹操を選んだと言っことか？

「っと、飛鳥、冥琳が来たから、私は退散するわ。冥琳には上手く言っておいて」

「りょーかいしましたー」

気の抜けた返事をした俺にクスッと笑った雪蓮様は、二階の窓から飛び降りて行った。

雪蓮様の残していったお菓子を一口食べる。

「……八チミツだな」

廊下から耽美な歩く音が聞こえる、この足音は……冥琳さんだな。

「雪蓮！ここか！」

どかん！と扉を開け、冥琳さんが入ってくる。よっしゃ！当たり前だぜ！

「飛鳥、雪蓮がここに来たはずだが、どこに行った」

「さあ？俺はさっきまで寝てたんで、分かりませーん」

「ほう？ならこれはなんだ？」

冥琳さんは俺のかじっていた菓子を指差す。

「え？ここに置いてあったんで食べてるだけですけどー」

「……飛鳥よ、今すぐ雪蓮の居場所を言つのと、完治した後に雪蓮の仕事全てやるの、どちらが良い？」

「雪蓮様はその窓から飛び降りていきましたよー」

「ありがとう、飛鳥」

冥琳さんは窓から飛び降りる。雪蓮様、済まない。作戦失敗だ。

「はあー。今日も平和だなー」

この一週間後、俺達は袁術に黄巾党討伐の指令を言い渡されるのであった……

10・俺にはまだ、帰れるところがあるんだ……（後書き）

袁術ちゃんの科白書きに愧じます。

だがこれも今回でしばらくオサラバできる……はずです。

誤字、脱字、感想、おかしい所がありましたら、コメントよろしく
です。

11・戦乱の始まり

俺が帰還して約一週間。朝廷から黄巾党討伐の命が下されてから約二週間。

漸くというべきか、袁術から俺達へ荊州に入り込んだ黄巾党の討伐を任された。

詳しいことを聞くために、なぜか俺が袁術に呼び出されていた……

「袁術様、賈羽、ただいま参りました」

「うむ！今から言うことを、孫策に伝えて欲しいのじゃ！」

「あの、なら本人に言った方が早いんじゃないでしょうか？」

「だよなあ。何で俺が呼び出されたんだろう？」

「俺怪我してるんだよ？正直今の俺一般の兵よりも弱いよ？」

「孫策は妾を見るとき目が怖いから会いたくないんじゃない。その点お主相手だったら何も気にせずに済むからな」

目が怖い、ねえ？

そんなに怖いのだろうか？一応俺も身内だから、それ以外の人に向けられることはよく分らないけど……

「それで？詳細な作戦はどうするんです？」

「おお、そうじゃった。七乃、後を頼むぞ」

「はい。それですね、ここ荊州でも、黄巾党が暴れています。主なのは北の本体と南の分隊なんです。それで、孫策さんには北の本隊に当たって欲しいんです」

ええ！？袁術何もしないのか！とか、

どう考えても戦力差が激しすぎるだろ！とか

袁家の人間は揃いも揃ってバカなのか？とか、

いろいろつつこみどころはあったけど、そつと心の中にしまっておく。

でも正直いって、無理だろう。

戦力から考えて、袁術が本体に当たるのが妥当だ

「あー、戦力的に無理だと思っんですけど……」

「それを何とかするのが、お主の仕事じゃ」

「そうですよー。用は済んだんで、もう帰って良いですよー」

くそ、どうすれば良いんだ！このままでは、雪蓮様に使えない子扱ひされてしまう……

えーっと、今ある戦力で敵の本隊を全滅させるのは、無理ではないと思うが、こちらもかなりの損害を被るだろう。

今は独立に向かっている大事な時期。ここで戦力を浪費するのは避けたい。

金も無いし、兵糧も無いし、兵も無いし、武器も無い。これこそ八方塞か……

ん？ないなら、援助してもらえば良いんじゃない……ダメもとで頼んでみるか……

「了解しました。が、こちらから少し条件を付けさせていただきます」

「条件？一応、聞いてあげます」

「えとですね、兵、資金、兵糧、武器を支援してもらいたいです。それが無ければ、本隊には当たりません」

「なんで妾が孫策の支援なぞせならんのじゃ」

「それでは、俺達は南の分隊の方へ当たります。既に出撃準備は整っているので、今すぐにも潰せにいけます。そうになると、荊州での黄巾党討伐の戦功は全て我々のものになりますが、よろしいでしょうか？」

「うーむ、七乃、賈羽は何を言っておるのじゃ？長くてよく分からん」

「簡単に言つと、手柄を全部貰っちゃうぞってことです」

「な、なんじゃと！？そ、それは大変じゃ。七乃、今すぐ支援の準備をするのじゃ！」

「はい。ただいまー。賈羽さん、一緒に来てください」

「分かりました」

良かった。さっき心の中でバカと罵ったことを謝ろう。そして、袁術をバカに生んでくれた神に感謝しよう。

「さてと、準備万端だ。後は手筈どおりに合流するだけだな」

袁術からは、驚くほどの物資を手配してもらった。これで何とかなるだろう。

「よし！出発するぞ！」

「お、見えてきた見えてきた」

行軍途中の皆を見つける。

「飛鳥お疲れ様。袁術なんていつてた？」

「俺達は北の本隊へ当たれ、だそうです。一応そのための支援物資と兵を貰ってきました」

「ほう、私たちも戦力差をどうやって覆そうか四苦八苦していたんだが、これで一気に解決できそうだな」

「それで、作戦は決まっただんですか？」

こちらの兵は袁術から借りたのも合わせて一万と五百。賊とはいえ策もなしに突っ込めばかなりの損害が出るだろう。

「そうね、やっぱり火計じゃない？」

火計か、確かに微損害でたくさん敵を屠れるな。

「雪蓮はそればっかだな」

冥琳さんが呆れたように言う。火計ばっかなんだ……

「あら？冥琳は反対なの？いいじゃない火計。真っ赤に燃える炎つて、見るだけでもゾクゾクしてこない？」

「そういうことばっか言ってるよ、変人に思われますよ」

うつとりした表情をする雪蓮様につっこむ。とても不気味だ……

「まあ、ゾクゾクするかはさておき、火計に関しては賛成だ」

「しかし、賊相手に策なぞ使わんでも良いんじゃないかろう？」

祭さんがぼそつと言う。

「いや、祭さん、そうは行かないと思いますよ。所詮賊だとは言っても、数が集まれば十分な脅威です。それに、今回の目的はただ討伐することだけじゃないですからね」

「飛鳥の言うとおりだ。圧倒的な力を見せて付けて勝利し、我等の名声を高めるのが第一目標だからな」

「なるほど……」

祭さんも納得してくれたようだ。っと、伝令さんが走りこんできた。そろそろかな。

「申し上げます！前方一里の所に黄巾党とおぼしき軍勢を発見しました。その数、約一万！」

一万か……数的優位はこちらにあるな。

「ご苦労様、さてと行くとしますか。久しぶりだから、腕が鳴るわね」

「了解した。では、黄蓋殿、先鋒は伯符に任せるので、その補佐をお願いします」

「心得た」

「私と伯言は左右両翼を率い、時機を見て火矢を放ちます」

「ということは、公瑾の合図で退けば良いのじゃな？」

「はい、よろしくお願いします」

「俺はどうすれば良い？」

「飛鳥は戦闘に参加できないからな。残りの兵を率い、後方で待機、敵の前線が完全に崩れたら攻撃に参加してくれ」

「了解！」

さしずめ後始末役って所だろう。

さて、俺にとっての初陣だ！まさか、少し前までは畑を耕してたなんて、自分でも信じれないよ。

「それじゃ、皆そろそろ行きましょ」

雪蓮様、祭さんの二人は素早く前線へと進む。

冥琳さんと穩さんも、両翼に陣を広げながら、機を計る。

俺は、雪蓮様の隊の後方で待機した。

「もう始まつてるみたいだな……」

前線から、金属音が聞こえてくる。こちらのほうは僅かばかりだが人数が多いためか、どんどん押ししている。孫策、黄蓋という猛将が率いているのだから当然だろう。

この状態では敵の前線が瓦解するのも時間の問題だ。

賊たちもこのままでは負けると言うことを感じ取ったのか、だんだんと後方へ下がっていく。

が、かなり優勢だったが、銅鑼の合図と共に、雪蓮様たち先鋒は

一気に後退した。

それを好機だと勘違いした……獣だから、逃げる物は追うという本能があるのかもしれないが……賊が前進する。

その時、両翼から火矢が雨のように降り注ぐ。人間、天幕などあらゆる物に発火する。予想外の火計に賊は完全に瓦解した。

雪蓮様、祭さんは、すぐに反転し、敵軍へ突撃。冥琳さんたちも、一步遅れて総攻撃に加わった。

賊は逃げるまもなく襲い来る攻撃に、反撃する意思すら失っているようだった。

「よし、そろそろだな……みんな！突撃するぞ！」

俺もこの好機を逃さずに敵軍へ突撃した。

その後は、もはや一方的になっていた。最初の計画通り、敵を全滅させることに成功した……

「雪蓮様、お疲れ様です」

自部隊の被害を確認した後、皆と合流する。

「被害はかなり軽微だな。これで圧倒的勝利というのは成されただ

るう」

「しかし、かなりあっけなかったのう。飛鳥と冥琳があそこまで言うからかなり警戒して戦に望んだんじゃが」

「いつもそうやって警戒していてください」

「まあいいじゃない。さてと、とっとと帰還するわよー！」

初陣を大勝利で飾った俺達は、悠々と城へ帰還した……

11・戦乱の始まり(後書き)

誤字、脱字、戦闘シーン薄いよ!とかありましたら、コメントよろしくお願いします。

12・苦勞人、賈羽

「袁術様、本隊の討伐はつつがなく終了しました」

賊討伐の帰り道、俺は袁術に報告をするために玉間を訪れていた。

「うむ、報告はそれだけか？ならば下がってよいぞ」

「わ、わかりました……」

それだけで良いのかよ……何か緊張した自分が馬鹿みたい……

「おお。待て、褒美をやらねばならぬな。お主を……」

「家臣にする以外の褒美でしたら受け取りましょう」

くそ、こいつまだ諦めてなかったのかよ……

「な、なぜ妾が言おうとしていたことが分かったんじゃ！」

バレバレなんですよ……

「しかし、孫策よりも妾に仕えた方が得だと思っんじゃがのー？何故孫策なんかにはえとるんじゃ？」

雪蓮様以外でも貴女の家臣にだけはなりたくないです……

「おお！アレじゃな、弱みを握られておるんじやろう！孫策は最低じゃな、仕えたくもない者の弱みを握り仲間にするとは、なあ、七乃！」

想像力が逞しいことで……半分当たってるのが悔しいな。

「はい！？あ、ああ、そうですねー」

張勳さんも大変だね……

「それでは、俺は戻りますね」

「むむうゝ妾は諦めんからな！」

俺はとぼとぼと玉間から出た……

「お帰りなさい、飛鳥。袁術との会話は大変だっただろう？」

城に帰ると、冥琳さんが待っていてくれた。雪蓮様方は宴会する

と言って、中庭で準備をしているらしい。

「ええ。正直、もう話したくはないですね」

「そうだろうな。雪蓮もそう言っていたよ。ところで、約束のことは何か言っていたか？」

「約束？何かありましたっけ？」

「どうやら、何も言ってきてないようだな。袁術は時期が来れば孫呉の独立に力を貸すといっていたんだが、その態度では破る気満々だな」

へえー。あの袁術じゃあ守る気はないだろうな。確かに袁術を破るとなると、今の自分達では無理だろう。

「まあいい。これは予想していたことだし、今日は酒宴を開くそうだからそこで鬱憤を晴らすと良い」

「そうすることにします……」

「おおー！冥琳、飛鳥遅いわよー！」

既に、宴会……もとい、酒飲み大会は始まっていた。雪蓮様、祭さんはもつべロンべロンだ。

「しえ、雪蓮？この酒樽はどうしたの？確かに宴会を開いて良いと

は言ったけど、こんな物まで用意するとは思わなかった」

「あ、そのこと？酒屋のおじさんから、勝利の記念に頂いてきたのよー」

机の上には、大量のお酒が入る酒樽が五つおいてあった。すでに一つは空になっているようだ。

穂さんは、机の上で突っ伏していた。恐らく、俺達が来るまでに生贄になったんだろう……

「策うー！ほれ、次行くぞー！」

祭さんは樽を一つ持ち上げると、雪蓮様にぶっ掛けた。

「なあ、何するのよ祭！ふざけんじゃないわよ！」

雪蓮様は同じように樽を持ち上げ、祭さんにもぶっ掛けた。

それに負けじと、祭さんも酒を掛ける。そんなのが続いていき、いつの間にやら酒飲み大会から酒掛け合い大会になっていた。

「冥琳さん……俺逃げてても良いですか？この後に、後始末をやらされる可能性が十割ほどあると思うんですけど……」

どうやら、掛け合う酒が無くなったようで、今度は樽を投げあい始めた。

どかーん。どがしゃーん。どどーん。

強すぎる腕力で投げられる樽は、地面に穴を開ける。

「……それでは、後は頼んだぞ」

「え！？ちよ、待って！」

冥琳さんは捨て台詞を残し、スタスタと帰っていった……

残されたのは、乱闘中の二人と、俺。いつの間にか穩さんはいなくなっていた。

「この、わがまま娘がー！これでも食らえー！」

「うっさいわよ！この年増！」

罵倒を続けながら、手元にあるあらゆる物を投げる。投げる。投げる。

手元に何も無くなった二人は、今度は俺を見つけた。

「ねえ、飛鳥はどう思う！？祭ってば、私から君主って肩書きを抜けば、生意気な小娘しか残らないって言うのよ！酷いと思わない！？」

……ああ。それには俺も同意。俺からしたら雪蓮様は年上だから、小娘って感じじゃないけど……

「ふっ、それ以外に何が残ると言うんじゃ！」

祭さんが煽る。はあ、これもう收拾付かないよね。うん、分かった。今日も俺の睡眠時間が削られる運命にあるのは十分分かった。

「な、なんですってえ！」

物を投げなくなったからまだマシだが、先程よりも質の濃い悪口が飛び交う。

最終的には雪蓮様が『もう祭なんて、知らない！』と言って、部屋に帰ってしまった。

その後、祭さんもいつの間にか居なくなっていた……呉の人々は足音もなく姿を消せるのか……

どちらにしても、俺の睡眠時間が後片付けに当てられたのは言うまでもない。

「え？またですか？」

翌日、読書をしようとしていた所に、袁術からお呼びが掛かった。ちなみに、昨日は一睡も出来なかった。後片付けが完全に終わった

のは、太陽が顔を出した後のことだ。

「袁術が次の黄巾党討伐作戦の概要を説明したいから賈羽を呼べて言ってるらしいのよ」

くそ、袁術め、寝不足なのに頑張って作った俺の大切な読書の時間を邪魔しやがって……

「悪いわね。飛鳥が来てから袁術に関しては押し付けっぱなしで」

とーっても良い笑顔で言う雪蓮様。袁術に関しては苦勞してたんだろっな。その反動でお酒か……ふざけんじゃねえぞこの野郎。

「いえ、大丈夫です。それでは、行ってきますね」

俺は寝不足の体に鞭打って、袁術の居城へ向かった……

「袁術様、ただいま参りました……」

「おお、やっと来たか……どうしたのじゃ？顔色も悪いし、声も何

か抜けておるぞ？」

そりゃね、怪我を押しして戦に出陣し、帰ってきたと思ったら酔っぱらいの相手、最後には寝ずに後片付けて、体調不良にならない訳ないでしょう。

「で？作戦の概要ってのは？」

「おお、そうじゃった。それでは七乃、頼んだぞ」

「はいはい。とりあえず、大きな集団は討伐できましたが、まだ黄巾党はいっぱい居ます。ですから、これから自由に出陣して、ここ荊州から黄巾党を消滅させてください」

やっぱり袁術は何もしないんですね。うらやましいです。

それにしても、自由に出陣して良いとか……いちいち指令出すのがめんどくさくなっただんな。

「以上ですね。それじゃ、帰ります」

さっと踵を返して玉間から立ち去ろうとする。

「ちよ、待つんじゃない！」

「……何か用があるんですか？」

俺は、早く、寝たいんだ！！

「そういえば、孫策と約束があったことを思い出してる？ある条件付きでなら約束を果たしてやっても良いと思っただんじゃない」

冥琳さんが言ってたあの約束が……条件付きってのが気になるな。

「……………条件ってのは？」

「お主が、妾に仕えてくれると言っならば、今すぐその約束を果たしてやつても良いぞ？」

そんなことだろうと思った……………でも、これはかなりの好条件じゃないだろうか？俺さえ我慢すれば、雪蓮様は次の段階へ行くことが出来る……………

「……………考えて見ます」

「うむ。それでは、戻って良いぞ」

俺は昨日よりも思い足取りで玉間を出た……………

12・苦勞人、賈羽（後書き）

いつも、穩さんの存在を忘れてます……

いつも最後に気づいて、無理やり付け足してます。

どうにかしなくては……

誤字、脱字、感想などありましたら、よろしくお願いします。

13・黄巾党殲滅戦

結果的に言つと、俺は袁術の誘いを断つた。

この件については、いろいろといざこざがあったが、それを語るのはまたの機会としておく。

そして、袁術は雪蓮様に怯える様になり、俺は改めて雪蓮様に忠誠を誓つた。

さて、俺の初陣から一ヶ月ほど経つた。その間に怪我は完治、ともに戦えるようになった。

その間に、黄巾党はさらに、驚くほどの速さで勢力を増した。官軍も迎撃に出たが、連戦して敗北。それも相まって黄巾党の勢いは収まるを知らなかった。

自分達も、袁術主導の下黄巾党の討伐を重ねていくが、所詮一地方でのこと、黄巾党全体の勢力は日増しに大きくなっていくようだった。

だが、漢王朝が対応しきれなかった匪賊に対し、各地の諸侯はかなりの活躍を見せる。

まず、黄巾の乱が起きる前から着々と勢力を伸ばしていた曹操は、

戦略的な重要地を的確に落としていった。

袁術の従姉である河北の袁紹や、幽州の公孫瓚、涼州の董卓は早期から討伐を初め、結果としてかなりの戦功を立てる。

義勇軍でありながら、他の諸侯と遜色ない戦果を挙げている劉備。彼女は、いまだ負けたことがないという無敗伝説を打ち立てている。そして、我らが孫呉……と、それを利用する袁術だ。

彼女ら諸侯たちのおかげで、少しは黄巾党も勢いを弱めつつあった。

孫呉は、この乱を通して名声を得ることを目的とし見事、雪蓮様を英雄と言わしめるまでになった。黄巾の乱が起ころなければ名声を高め、袁術からの独立へ向かうことは出来なかっただろう。なんとも悲しいことだ。

そして、そろそろ黄巾党壊滅の兆しが見え始めた頃、久しぶりに袁術からお呼びが掛かった……

「……おい、賈羽よ、さつきから何をぶつぶつ言っておるのじゃ？
正直、怖いぞ」

「あ、すいません。ちょっと前回から時間が空いたんで状況説明を

してました」

「ん？まあいい。今回呼んだのは、孫策に黄巾党本隊と決戦し、撃破してもらいたいんじゃない」

俺は、いつもどおり雪蓮様の代わりに袁術へ命令を聞きに来ていた。これはもう恒例になっている。そして、わけ分からん命令を下してきた。

「はい？あの、荊州の黄巾党とはかなり規模が違っんですけど……正直、死に行くような物かと」

いつもどおりというべきか、袁術は思考回路がぶっ飛んでいるようだ。確かに今は好機だと思う。だが、二十万の黄巾党がいるのに、戦力たった一万の孫呉を当てるのは、どう考えても無謀な話だ。

「何を言っておるんじゃない？黄巾党が弱っておる今こそ、撃破のときだと思わんか？それに、今孫策は民に英雄として祭り上げられとるではないか。二十万の黄巾党など、ちょちょいのちょいで、倒せるんじゃないだろうか？」

「さすがに英雄の孫策でも、二十万は戦力が足りなくて無理です。あの数に対し、孫呉は多く見積もっても約一万の兵力しかありません。さすがにこれでは……」

まあ、袁術のことだし命令を撤回することはないだろう。そこで俺は、予てから雪蓮様や冥琳さんに言われていた事を実行に移すことにした。

「ただ、各地に散らばる呉の旧臣たちを呼び寄せても良いなら、撃

破することも可能でしょう」

「ふむ……しょうがないのう。認めてやるから、さっさと出陣するのじゃ」

「了解しました。袁術様はどうするんです？まさか、出撃しないわけではないでしょうね」

内心『よっしゃ！』と叫びながらも、あくまで冷静に袁術にたずねる。

「無論じゃ。朝廷からの命令じゃからな。当然、妾も出るに決まっておろう」

「私達は準備を万端にした後、西進して黄巾党の別働隊を撃破する予定です。孫策さんたちはお強いですから黄巾党の本隊と戦ってくださいね」

無茶いつなあ。まあ、確かに強大な敵を撃破したほうが名声は高まる。袁術はそういうことを考えているんだろうか？たぶん袁術の思考の底辺には『妾の物は妾の物、孫策の物も妾の物』っていうのが根付いてそうだから、孫呉の名声も自分の物になるんだと思ってるんだろうな……

「で？連絡すべきことはこれで終わりですか？」

「うむ。後は、いつ出陣するか連絡を頼むぞ。それと、孫策をこの城へと近づけないようにして欲しいのじゃ」

「はいはい。了解しました。雪蓮様には重々近づかないように伝え

ておきますよ」

袁術は、あの一件から雪蓮様を恐れている。当然といっちゃ当然だが……俺でもあんな冷たい視線で睨まれながらあんな事言われてはかなりビビルだろうからな。

「では下がってよいぞ。絶対、絶対に孫策を近づけてはならぬからな！」

後ろで袁術がぎゃーぎゃー叫んでいるが、気にせず玉間を出て、いつもの中庭会議に戻ることにした。

中庭会議（命名自分）は、袁術の間諜に謀がばれない様にするために普段から会議を中庭でするものだ。中庭からだ人影がよく見えるのだ。

「ただいまー。また袁術から無茶苦茶な命令が下されましたよ」

「お帰り飛鳥。今度は何？まさか、黄巾党の本隊を叩けとか言わないでしょうね？」

雪蓮様が恐る恐る尋ねる。さすが雪蓮様。今日も勘は冴え渡つてるみたいだな。

「雪蓮様、当たりですよ。我々は本隊を叩くことになりました。ただ、お馬鹿さん二人に呉の旧臣を呼び寄せる許可を貰ってきました」

「おお、その馬鹿さ加減には感謝したい所だな。これで戦力を増強することが出来る」

「それなら早く使者を出して、皆を集めましょ。甘寧に周泰、蓮華ね」

雪蓮様には二人の妹がいる。孫権様と、孫尚香様だ。てことは、尚香様は呼ばないのかな？

「雪蓮様、尚香様は呼ばないのですか？」

「ああ、えーっとね、もし私達に何かあってもシャオ……尚香が居れば、孫家の血は絶えないでしょ？」

……成る程。戦場は常に死と隣りあわせだ。雪蓮様に限ってそんなことは無いと思いたいが、絶対無いとは言いきれない。

「それではそうしよう。出陣はいつにする？」

「袁術には全ての準備が整うまで出陣しないとありますから、準備が完璧になってからにしましょう」

「そうね。それじゃ、穩は使者の選定と兵站を、祭、飛鳥は軍編成をお願い。私と冥琳は軍略の決定をするわ。蓮華たちとの合流は行軍途中で行うから頭に入れておいて頂戴ね」

「了解です。軍の編成が終わり次第出発しましょうか」

俺達は、各々が自らの仕事に向かった。俺は祭さんと軍編成だ。兵はそう多くは無い。なので、そう労力が掛かる仕事でもなかった。ほとんどは祭さんがやってくれたし。

「いよいよ出陣ね。目指すは冀州の黄巾党本隊よ」

俺達は、黄巾党を終わらせるために出陣した……

行軍途中の穩さんの話によると、孫権様が合流するのはもう少し後らしい。なので、初戦は自分達だけの戦力で倒さなければならぬ。連れてきた兵はあまり多くは無いので、いきなり本隊に当たってはすぐに全滅するのが関の山だ。そこで、まずは出城に籠っている黄巾党を殲滅し、その後他の諸侯と足並みをそろえて戦闘に入るといのが基本方針になった。

「飛鳥、ちよつといいかしら？」

「雪蓮様？なんですか？」

今俺達は行軍を一旦止め、お昼ご飯を食べている。このご飯は塩気が付いているから大好きだ。普段は塩なんか高価で使えないからな。

「この後の行軍なんだけど、私についてきてくれない？この後すぐに敵と接触するだろうから、早めに準備をしておきたいの」

「ん？いいですよ。そんなことならお安い御用です」

「頼むわね。私もお昼ご飯食べたいから、またあとで」

「了解です」

その後、行軍を開始すると雪蓮様の言うとおりにすぐに敵を発見、斥候の帰りを待たずに雪蓮様が出るとか分けわかない事言い出した。

「あ、あの雪蓮様？貴女は一応君主なんですから、そういう軽い行動は慎んだほうが……」

「……飛鳥、君主命令よ。貴方の部隊は私と一緒に敵の城へ突撃。

恐らく敵は城からでて布陣するでしょうから、野戦になるだろうけどね」

「ええ！？ちよ、そんなことしたら冥琳さんに殺されちゃうんじゃない……」

「全員抜刀！突撃い！」

雪蓮様は俺の制止を無視し、敵陣へ突撃、これまた雪蓮様の予想したとおり、敵は城前へ布陣していた……勘で全部済むなら斥候とかならないじゃん……

「ああー！もう！俺達も突撃するぞ！」

やけくそだ！雪蓮様の後ろについて突撃する。

流石雪蓮様といったところか、どんどん速度を上げていく。

そして後ろから、鬼の形相の冥琳さんが現れた。

「やっと追いついたぞ、孫策、賈羽！待ちなさい！」

「冥琳さんごめんなさい！説教はあとからいくらでも受けるんで、今は戦闘準備をお願いします！」

「く、あとでみっちり説教だからな。祭、穩、戦闘準備だ！」

冥琳さんは、兵を突進する俺達の左右に展開させ、包み込むような陣を敷いた。

これにより元来無陣で殺しつくすしか脳のない賊どもは混乱、さらに雪蓮様の部隊の神速とも言える攻撃で、瓦解した。

あとは、殲滅戦だ。そんなに時間が掛かることもなく、敵は壊滅した。

「雪蓮様、お疲れ様です。ですが、この後に冥琳さんの説教が待っていますよ……」

この後、孫権様が到着なさるまで、延々と雪蓮様と供に説教を受けることになった……

14・黄巾党殲滅戦 - 戦で勝ち、勝負に負ける -

「後方に砂塵が見えてきましたよー。どうやら蓮華様たちが来たみたいですよ」

初戦を雪蓮様の独断専行などがありながらも勝利した俺達は、物資を回収し、再び行軍に移っていた。

その途中、予定の時間ぴつたり孫権様が来たということを確認が報告をする。そして俺は……

「で？しょうがないから雪蓮に付いて行つたと、そういうことか飛鳥？そうになると、お前が最初に言っていた無理やり雪蓮に連れて行かれたということに矛盾するんだが……そこはどう説明するつもりだ？まさか、嘘をついていたなんて事はないよなあ……雪蓮も何を終わったような顔をしている、元はといえばお前が先行するのがいけないんだ。項王にでもなつたつもりか？未だ独立すら成せていないのだから、そういうた真似は止して貰おう。それに、お前は兵に勇敢な姿を見せなければならぬからと言っていたけど、あんな賊に対しては唯の蛮勇でしかない。それに、雪蓮にもしものことが合つたらどうするつもりなんだ？お前のことを守れなかった罪で飛鳥を処刑しなければならぬだろうし、そうなるとお前の独断の所為で王と優秀な家臣を失うことになるんだ。お前の命はお前だけの物ではない。それに人の価値も違う。分かったかしら？……ん？穏、なんだって？すまないがもう一度言ってくれないだろうか？」

雪蓮様と供に説教……もとい、尋問……いや、拷問の真つ最中だった。

「えーと、後方から蓮華様たちが来られたようなので、報告を……」

「め、冥琳！は、早く迎える準備をしなきゃならないから私はもう行くわね！」

雪蓮様が立ち上がり立ち去ろうとする。くそ、逃げられてたまるか！こっちは半分巻き込まれた形でこのクソ長いせつきよ……拷問を受けてるんだ！

「あれ〜？その準備は祭さんが既に行っているはずですけどー？今から行つて何をするんですかー？まさか、サボリに行くわけじゃないでしょうね？」

かなりわざとらしく説明するように言う。言われてるほうから見たらかなりウザイだろうな……

「そつだぞ雪蓮。まだ話は終わっていないんだからな。ほら、早く座れ。穩は出迎えを頼むぞ」

雪蓮様は、『この野郎……折角逃げられる好機だったのに……あとで覚えてなさい』って言いたそうな顔で俺を睨む。はっはっは、自業自得さ！だから、俺に当たるのはやめてください……

「は〜い。了解しましたー。雪蓮様方、頑張ってくださいねー」

「それでは、続きをしようか。それで？実際飛鳥は雪蓮に連れ去られたのか？それとも、自分の意思で雪蓮について行ったのか？」

「じ、自分の意思でございます。最初に嘘をつきまして、本当に、誠に申し訳ございませんでした……」

「……飛鳥には罰として減給三ヶ月だな」

え！？マジですか！

雪蓮様が『ざまあ見なさい！』って言いたそうな顔で俺を晒う。

「雪蓮もこれからは気をつけてくれ。別に雪蓮のことを信用していないわけじゃないんだ。ただ、こういう行動は控えてくれると助かる」

「……はい」

気の抜けた返事をする雪蓮様。絶対この人守る気無いよね。うん、全くと言っていいほど無いよね。

「はあ……今回はそれ以上の処罰は無しとする」

処罰受けたの俺だけじゃん。納得いかんぞ！

とまあ、不満はあるけど、体面的に冥琳さんのほうが上なので抗議はしない。はあ、三ヶ月は節約しなきゃ……

「しかし、蓮華は相変わらずね。融通が効かない所とか」

孫権様の牙門旗が近づいてくる。すごいなー、かなりきっちりしてるぞ。でもあれでは急な戦闘に対応できないかも……雪蓮さまの言ってた融通の効かなさってのはこういうことかな？

「孫権様って真面目なんですな。普通あそこまできっちりした行軍

は出来ないと思いますよ」

「まあ、カタブツとも言えるけどね」

なるほど……孫権様、一体どんな方なのだろうか、雪蓮様みたいな人ではないことを祈るばかりだ。

ある程度近づくと牙門旗がびたりと止まり、人影が近づいてきた。あの人が孫権様のようだな。

「蓮華、ひさしぶ……」

「お姉様！何をやっているんですか！先程単騎で敵陣に突撃したと聞きましたよ！」

出会い頭に再び説教を受ける雪蓮様、あれが孫権様か……カタブツ、言っくに違わずだな。

「あ、あの……一応単騎ってわけじゃ……」

「そういう問題ではありません！貴女が前線に出ることすら本来はあつてはならないことなのですよ？」

「え、えと……ごめんなさい」

雪蓮様が謝ってもなお説教を続ける孫権様。その迫力に押されているのか、雪蓮様は平謝りになっている。あれが孫権様か……最終的には雪蓮様は砂のようになっていた。大丈夫かな……

「……冥琳さん、あれが孫権様ですか？どうやら、俺は好きになれそうにありません」

「大丈夫だ」

大丈夫じゃないって……流れ的にこの後俺が精神的にボロボロにされるのが目に見えてるって言うか……

……ほら来た。

「お前か。お姉様を殺すかもしれなかった無能は」

はあ、第一声がこれかよ……第一印象は×だな。

「……一応ね」

孫権様は俺を頭のとっぺんから足の先までじろじろと眺める。どんな罵倒が飛んでくるやら……

「……私が孫権、真名は蓮華よ。これからよろしく頼むわ」

「……え？」

え？いきなり真名？まさか、罵倒の代わりに真名が飛んでくるとは……

突然のことに頭が混乱する。えーっと、こういつ時はどういつ対応をすれば良いんだっけ……

俺がしどろもどろになっているのを孫権様が不安な目で見つめてくる。

「……私の真名を受け取るのが嫌なの？」

「ち、違います、えと、俺は飛鳥です。よろしくお願いします！」

「よろしくね」

孫権様は笑顔を見せると俺に背を向け立ち去っていった……

と、とりあえず、蓮華様……よし、覚えた。

「……冥琳さん、あれが孫権様ですか？すごくびっくりするほどの豹変ぶりでした……」

「だから大丈夫といっただろう。まあ、確かにあれには私も驚いたがな」

「え？てことは冥琳さんが想像してたのは俺が罵倒されているとこるってことですか？」

冥琳さんは目を背ける。前々から思ってたけど、冥琳さんって何気にひどいよね。

まあ、どうやら、嫌われているわけではない……のかな？少し安心はした。

と、そんなやり取りをしていると、復活した雪蓮様が蓮華様と見知らぬ少女二人を連れて戻ってきた。

「雪蓮様、お疲れ様ですー。これからは俺を巻き込まないようにしてくださいね」

雪蓮様に労いの言葉を掛ける。雪蓮様は『無理』とでも言うような顔で俺に答えた。

「それで雪蓮様、後ろのお二人は周泰さんと甘寧さんですか？」

後ろの二人を見ながら問いかける。

「そうよ。それじゃ、まずは自己紹介かしらね？」

「あ、俺は賈羽文鶴って言います。真名は飛鳥です。よろしく願いします」

「えと、私は周泰、真名は明命です！こちらこそよろしく願いますー！」

元気な子だなー。この子とは仲良くなれそうだ。えーっと、明命さん……よし覚えたぞ！

「甘寧だ。真名は思春」

俺と話をするのが嫌といわんばかりにぱっと自己紹介を終わらせられた。む、嫌われているのかな？

まあ、とりあえず思春さん、覚えたぞ。

「私は先程自己紹介をしたから良いわ。改めてよろしく、飛鳥」

「はい、蓮華様、よろしくです」

俺がそう言うと、露骨に嫌そうな顔で思春さんが俺を睨んでくる。え、真名呼んじやいけないんですか？

「あら？蓮華、飛鳥と真名交換してたの？蓮華のことだから、『ここから立ち去れ！』みたいなこと言ってると思ったのに」

おお。下手すりゃここから立ち去らなければいけなかったってことか。

「まあいいわ。自己紹介も終わったし、部隊の再編成をした後出発しましょ」

「そうだな。思春、明命は祭殿の下に付き、後曲中央には雪蓮、両翼には私と穩だ。蓮華様は輜重隊の護衛と供に遊軍として待機をお願いします」

「あれ？俺はどうすればいい？」

なんか、毎回忘れられてるような気がしなくも無い。

「あ、飛鳥は雪蓮と供にいてくれ」

今、絶対忘れてたって思ったよね。案外俺の天敵は冥琳さんなのかもしれない。

「それじゃ、一刻後には出発ね。準備開始！」

俺達は黄巾党の本拠地目指して行軍を始めていた。

敵の数は二十万、対して自分達の戦力は二万ほど、正直この状態で戦っては勝負にもならないだろう。

だが、今回は他の諸侯も参加しての戦だ。それを合わせると兵はざっと十五万。まだ五万ほどの差はあるが圧勝できるだろう。

問題は諸侯が連携することがありえないということだ。孫呉を含む諸侯が求めているのは名声。表立って連携するといっただけじゃそれが得る事は難しくなってしまう。

なので、諸侯が集まる時期に合わせて参戦し、敵総大将を討ち取る。そのためには、なるべく最後のほうに参入し被害を軽微に抑えながらも一番美味しい所をいただく。

そして俺達は黄巾党の本拠地の傍に近づいていた。

「壮観ですねえー。曹、袁に公孫、そして義勇軍の劉、いい感じに集まってるみたいですね」

「さてと、この城、どうやって落とす？」

「ふむ、力攻めでは落ちんだろうかな。何かしらの策を用いなければならんじやろう」

「ふむ、そうだな……」

この後、冥琳さんたちで色々な策を出し合ったが、どれも決め手に欠ける物ばかりだった。

そして、いつの間にか日が沈もうとしていた。

「……ねえ冥琳、もう正面から突撃で良いんじゃない？もう時間も無い、曹操辺りはもう動き出しているようよ。それなら曹操たちの策を無駄にしても攻撃したほうがマシじゃない？」

「お姉様！駄目ですよ、こんな堅牢な城が一か八かの賭けで落ちるとは思えません！」

「うーん、逆に曹操の策を利用するのはどう？曹操がどんな策を行うかはわからないけど、それに乗っかる形で攻撃すれば曹操には及ばずも名声を得ることも出来るはずだよ」

「そうだな……それが今出来る最大のことが……」

しょうがない、自分達の力で撃破出来ないのは癪だがここは曹操を利用させてもらおう。

その後、曹操を監視しながらも、自分達でどうにかできないか考えたが、結局有効な策は出ずに月が顔を出す時間になった。

「ん？曹操の軍に動きがあるな。あいつ等が向かっているのは……あの建物か。確かあれは兵糧庫だったはず……なるほど、そうか！」

よくよく考えると、敵方から倉庫のところに死角がある。曹操はそれを利用して火計辺りを仕掛けるつもりなのだろう。

くそ！今出陣しても間に合わないだろうな。曹操の軍師は誰だ？

「雪蓮様！今すぐ出陣してください、曹操の目的は兵糧庫への火計です！」

俺の言葉を聞いた雪蓮様方はすぐに出陣。だが既に展開していた曹操の軍に阻まれ、戦果を挙げること無く黄巾党の本拠は陥落した。

その際、曹操は黄巾党の指導者である張角ら三人を討ち取り、その名声を一層轟かすに至った。

そして、孫呉は、戦に勝ち、勝負に負けたのである……

15・満月が出る頃に(前書き)

サブタイトル一部修正しました。

15・満月が出る頃に

城への帰路、俺は今回のことを考え悶々としていた。自分の不甲斐なさと、曹操のことについてだ。

曹操……彼女は黄巾党殲滅戦において本拠地をほぼ自分達だけの力で落とすと言っかなりの戦果を挙げ、対して孫呉は分隊の城を一つ落とすだけと言っ結果に終わった。

俺の考える敗因は、総じて実力の無さ。軍略、用兵、その他諸々全てにおいて曹操に劣っていた。袁術の支配にあると言っことを差し引いても今の自分達では曹操には勝てない。

間諜によると、今回の策を考え出したのは天の御遣い『北郷一刀』だそうだ。北郷は大陸の人間では考え付かないような奇天烈な考えを持っていらっしゃるらしい。

さらに、北郷の出した策に補完をする、筆頭軍師『荀?』の存在。この二人の出した策で本拠を落とすと言っことだ。

俺たちは、周瑜、陸遜などの頭脳が集結しても城を落とす策を考え付かなかった。これは俺の実力不足もある。

そして『荀?』……やがて何処かへ仕官するとは思っていたがやりにもよって曹操とは……悪いが、約束は果たせそうに無いな。

曹操、そして天の御遣い、俺はあんたらに会ってみたくなつたぞ

……

俺は紺色の空を仰ぐ。未だ夜は明けず、星が頭上で輝き、満月が

辺りを蒼白く照らしている。

そういえば、俺があそこを追い出されたのも満月だったっけ……

荀？、いや、桂花。お前は俺のことを覚えて無いかもしれないけど、俺はお前のことを忘れた日は無い。叶わぬことだとは思っけど、できればもう一度話をしたいな……

それに、お前とは戦いたくは無い。いずれ群雄割拠の時代が来るだろう。そうなつては曹操と戦うことは避けられない……

俺は、嫌な思い出しかない満月を見ながら、そう呟いた……

「飛鳥よ、この仕事を頼む。また雪蓮が何処かへ行ってしまったな」

あの戦いから数週間。黄巾党は大陸からほぼ消滅し、再び大陸は平和になった。そう、大陸は……

「め、冥琳さん？これおかしくないですか？新たに皆が集まったんだから仕事は減るもんだと思ってたんですけど……」

……代わりに、俺の精神と部屋と体は平和になるところか阿鼻叫喚の地獄と化していた。

正直、この量は俺を殺そうとする意思が働いているようにしか思えない。だって、部屋が一杯になるほどの量だぞ？どう考えてもおかしいだろ……

「悪いな。私もやってはいるんだが雪蓮はいつもの通り、祭と思春は兵の鍛錬、明命は隠密として他へ行つて貰っているし、穩は蓮華様について勉強中なんだ」

「ちょ！最後おかしくないですか！？何、勉強って！？俺は仕事が一番の勉強になると思いますよ！」

ありえない。孫呉の皆は狂っているのではないか？

なんせ戦いが終わってすぐだから、五週間くらいもこんなのが続いている。適度に仮眠はとっているが、休憩といえは時間制限付きの食休みと、廁へ行く時だけ。これはもう軟禁状態といっても過言ではない。

「確かにそうだが、蓮華様は帝王学をやっているんだ。こんな仕事をやったところで身に付く物でもないと思う」

「あーはいはい。分かりましたから仕事置いて出てってください。冥琳さんも仕事あるんでしょ？」

「え？あ、ああ。私も自分の仕事に戻るとする」

冥琳さんは仕事の束（山）を部屋に置くと扉を開け、そそくさと戻っていった。

……何ださっきの、冥琳さん声の上擦ってたよな。まさか、仕事をやっていないとか……無いな。冥琳さんは腹黒いけどこういうこととはちゃんとやる人だ。

はあー。今日も今日とて仕事仕事仕事仕事仕事……

「うがぁー！もういやだ！こんな生活ありえん！これならまだ農民やってた方がマシだ！くそ、孫呉は俺を殺す気か！」

あまりの精神的苦痛に、一日十回ほどこんな感じに叫ばないと言っ
て行けなくなってきている。ちなみに、今回で十五回目なので、
最高十八回の記録を更新しそうだ。

「はぁ……………鬱だ」

俺は冥琳さんに食休みに言ってくると告げると、食堂へ向かった。
その間冥琳さんは所要時間を計っておき、一刻以上掛かったら仕事
が増えるというおまけ付だ。

「はぁ……………ごはんもおいしくない。ていうか、味がしない」

広い食堂でぽつんと一人だけの昼食をとっていると、鍛錬が終わ
った祭さんと思春さんが食堂へ入ってきた。

が、祭さんと思春さんは俺と真反対の席へ座り、二人で会話をし
ながら食事を始めた。

……俺がこんな生活を始めてからだ、なぜか皆に避けられて
いる。冥琳さんとは仕事上必要な会話はするが、それ以外のところ
では目も合わせようとしない。

唯一皆の目が届かない所で蓮華様が話しかけて下さったりするが、

それ以外では全くといって良いほど会話が無い。

まあようするに、蓮華様を除く孫呉全員によるイジメ？

そう考えてみると、案外本当に俺を殺そうとしているのかもしれない……

「はあ……………ないない。疲れの溜まりすぎだな」

仲間として認めてくれた雪蓮様がこんなことをするはず無いもんな。たぶん、すれ違いになっているだけだろう。

はあ。もたもたしては仕事を増やされてしまう。さっさと戻ろう。

「残念、所要時間二刻だ。仕事は増やさせてもらっぞ」

部屋へ戻ると、冥琳さんが仕事の束（山）を持ち、無慈悲な笑みを浮かべながら立っていた。

「え？本当に二刻も経ちましたか？俺の感覚ではまだ一刻も経ってないんですけど……」

おかしい。どう考えてもおかしい。俺は体内時計には自信があるほうだ。さらにここ数週間の生活でさらに磨きが掛かっている。その俺が一刻以上も誤差を出すはずが無い。

「いや、お前は時間を守れなかった。後は頑張っただけでいい。それでは」

冥琳さんはすれ違いに俺の肩へポン、と手を置くとそう言葉を残し立ち去って行った。

「マジかよ……」

……納得はいかないが頼まれた以上やらないわけには行かない。それにまだ残っている仕事もあるからな。

「はあ。えーっと、次はあの仕事で……これはその部署に行かないとわからないから後回し……」

再び黙々……ではないけど仕事をやり続ける。

「はあ。そろそろ日も暮れる頃か……雪蓮様は今日も酒を飲んで
いるのかな」

太陽は橙色の光を残し地平線の彼方へ消えようとしている。そう
いえば酒なんてもう二月以上飲んでない。最後に飲んだのが何時な
のかわからなくなる位だ。

「はあ。たまにはお酒でも飲んでゆっくりしたい……本も読んでな
いのが溜まってるし、早く読んでしまわなきゃな」

そんなことを呟きながら何となく窓の外を見つめると、弓を持っ
た兵がこちらを狙っているのが見えた。

「え？………お、おいおい！マジかよ、これは洒落にならないぞ
！」

弓から放たれた矢は、綺麗な放物線を描き開いていた窓から俺目
掛けて飛んで来た。

「くそ、俺はっかりなんでこんな目に遭わなきゃならないんだよ！
………こんな攻撃食らうか！」

俺は部屋に立てかけてあった俺の弓で矢を叩き落とすと、すぐに矢を放った人物へ矢をお返しさせてもらう。

先程と同じように綺麗な弧を描き、その人物へグサッと、嫌な音を立てて刺さる。

どうやら、頭にまともに食らったようで、倒れるとピクリとも動かなくなつた。

ふう、これで当面は大丈夫だろう。問題はあの刺客がどこの者かだ。

俺はその刺客の正体を調べに行き、それを知ると愕然とした。

「くそ、何でこんな事に……」

その人物は、間違えるはずも無い孫呉で支給される服を着、孫呉で支給される弓と矢を持った孫呉の兵だった。

……なぜ？なぜ孫呉の兵が俺を殺しに来るんだ？確かこの人は祭さんの部隊の人だったはずだ。祭さんの部隊は精鋭だ。元々敵国の間諜であつたということは考えにくい。

という事は、もしかして本当に……

「……本当に俺を殺そうとしている……のか？」

と、とりあえずこの事は雪蓮様に報告しなくては……いや、もし雪蓮様が俺を殺そうとしているのなら味方の兵を殺した罪で俺を処刑するはずだ。

ならばどうすればいい？ここから逃げるか……いや、それは根本的な解決にはならぬ筈だ。俺は過去の孫呉の弱みを握っているから、逃げようとするれば寧ろ殺す口実を与えてしまう。

いつそのまま流れに身を任せ、生きるも死ぬも神のみぞ知る……という風にしたほうが良いのかも知れないな……

いや、それでは駄目だ。とにかく、この死体を処理しよう。地面に付いた血液はとれないだろうから、死体と一緒に埋めよう。

「くそ、何でこんなことに……少し前までは皆優しく接してくれていたのに……」

地面を掘りながら誰に言うわけでもなく呟く。日は沈み、月が顔を出している。今日は満月だ。

満月の日には、決まって悪いことが起こる……

「はあ、終わった……後は何事も無かったように部屋に戻らなくて
は……」

最悪、周瑜が部屋を見に来ているだろう。この暗殺は孫呉全員が仲間になり考え出したことであるだろうから、下手をすればその場で殺されかねない。

……最大限の注意を払い部屋の扉を開ける。中から光が漏れているから誰かが居るのだろう。

「……誰だ」

自分の出せる最大に低く、威圧感の効いた声を出す。部屋の中に居るのは孫策のようだ。孫策はビクッと肩を震わせると、こちらを振り向き、ゾツとするほど深い目を俺に向けた。

「……飛鳥じゃない。仕事をほっぽり出して何をやっているの？まあ、仕事云々に関しては私も人のことは言えないけど……」

俺が知るいつも通りの雪蓮様だ。だが、俺を殺そうとした孫策でもある。

「……出てっくれ。あんたは俺に用は無いはずだ。それに、俺もあんたに用は無い」

「あら？しばらく会わない内に随分と嫌われているみたいね。それ

もそうか、私の尻拭いを飛鳥や冥琳がやってくれているんだもんね」

「……うるさい。早く出て行け」

「冗談で言った風の孫策に対し俺がキツイ口調でそう言つと、孫策はムツと嫌な顔をし、俺に問いかけた。

「ねえ、仕事のこと以外に私が嫌われるようなこと飛鳥にやった？
そこまで毛嫌いされる理由が見つからないんだけど」

「……俺は出て行けと言っている。そしていつも通り俺に仕事を押し付けて、面白おかしく酒でも飲んでいればいいだろう？」

「……分かったわ。ごめん」

孫策はそう言つと、すぐに部屋から出て行き小走りで自室へ戻っていった。

「……は、はあ。疲れた……何だあの威圧感は……」

孫策が見えなくなるのを確認すると、一気に息を吐いた。

気丈に振舞っていたつもりだが、心臓はバクバクが止まらない。俺は孫策が何時斬りかかって来るかと身構えていたがそんなことにはならなかった。だが、孫策の懐にはいつも宝剣があるから、油断してはやられる。

「今日は体力を温存するために早く寝よう……」

俺は久しぶりにゆっくりと寝台で寝ることが出来た……

「うう、朝か……」

気がついたら朝になっていた。五体満足なところを見ると寝てる

間に襲われたりということは無かったようだ。

よく考えるとその可能性もあるのだからこれからは警戒しなくては……今回は運が良かったんだな。

「さてと、早速仕事……じゃない。今の状況を確認しておこう」

とりあえず今分かっていることは、

孫呉の全員が俺を殺そうとしている。原因は分からない。蓮華様だけは普通に接してくれたから、もしかしたら蓮華様だけは加担してないのかもしれない。

昨日黄蓋の兵士が俺を襲いに来たことを考えると、兵士達もこのことを知っていると考えていいだろう。俺には直属の部隊が居ないため俺の味方は誰も居ない。

このことから考えるに、兵を脅して事情を聞くというのが一番手っ取り早いだろうか……いや、知ったところで俺は何も出来ない。そんなことをするぐらいなら見つからないように逃げたほうがマシだ。

しかし、何故俺を殺そうとしているのだろうか。何時裏切り情報を敵に売るかも分からない農民を仲間に置いておくよりは、殺したほうが良いという考えだろうか？

……今それを考えるのは不毛だな。今重要なのは孫呉が俺を殺しに来ているという事実だけだ。

「……俺はこれからどうしようか……」

昨日、矢が飛んできた窓から空を見上げる。青空の下に薄っすらと満月が見える。満月は俺にとっての死神だ。いつも不幸を俺に持つてくる。

俺が捨てられたときも、あそこを追い出されたときも、そして今回も……

「……くよくよしていても仕方が無い。とりあえず怪しまれないように仕事をしながら解決策を考えよう」

俺は孫呉からの仕事を黙々とこなしつつ、孫呉からの暗殺をどうやって逃れるかを考えるのであった……

15・満月が出る頃に（後書き）

現代語が使えないのって難しいと改めて感じました。

例えば、最初は『爆弾』という単語を使おうとしたのですが、

「あれ？この時代に爆弾なんて無いじゃん」

と思い、急遽別の言い回しに変えたりと、結構大変です。

なので、まだ飛鳥が使っていない単語なども混ぜられている
かもしれませんが。見つけたらコメントよろしく願います。

16・満月が出る頃に 解(前書き)

前回判明しましたが、飛鳥君の幼馴染は桂花ちゃんです。

16・満月の出る頃に 解

「ねえ冥琳。最近飛鳥の様子がおかしいと思わない？なんていうか、私のことを避けてるといっつか、警戒してると言っつか……」

「そうかもしれないけど、それも当然じゃない？飛鳥はここ一ヶ月ほど雪蓮の仕事をずっとやっているんだから、嫌われても当然だと思っけど？」

私が仕事をしていると、珍しく雪蓮がやってきた。いつもは街で遊んでいるんだが、どうやら飛鳥がかまってくれないので拗ねているらしい。

愚痴なら祭にでも言っつてこればいい物を。

私は仕事なんだ、と心の中で悪態をつく。

まあ、人のことを省みないのは昔から変わらないが……

「ちよつと、私は本気で言ってるのよ？冥琳もちゃんと考えてよ！この前なんて、久しぶりに飛鳥とお話しようとして部屋に行ったら一方的に帰れつて言われたの。今までの飛鳥の態度からしておかしいと思わない？」

「はあ。飛鳥が雪蓮にそんな態度をとるわけ無いでしょう？酔つてて記憶が曖昧なだけじゃ無いの？」

「もう！あの時の私は酔つてなんか無いわよ！この前の飛鳥はどう見てもいつもの飛鳥じゃなかった。私に殺気を飛ばしてきたのよ？」

……雪蓮のこの剣幕、本当みたいだな。まさか、仕事のやりすぎで精神が崩壊してしまったとか……

「……そこまで言うなら今から飛鳥に会いに行こう。実際に話してみれば誤解だと分かるはずだから。それに、お土産でも置いていてあげたらどう？」

「……うん。分かったわ」

私は所狭しと置かれた仕事を踏まないように部屋から出ると、お土産として饅頭を持って雪蓮と供に飛鳥の部屋へ向かった。

「あすか？入るわよー」

飛鳥の部屋の前に立ちそう一言言つと、雪蓮は扉を開けた。すると、夥しいほどの仕事の山が廊下へ流れ込んできた。その仕事の濁流はしばらく流れ続け、しばらくすると人一人がやっと入れるような穴を残しその流れは止まった。

「め、冥琳。これだけの量を飛鳥に任せてたの？これだけの量をやらされたら確かにあんな態度をとりたくもなるかも……」

「い、いや、私はこんなにも仕事を頼んだ記憶は無い。まさか、穩やら祭やらが自分の仕事をここに置いていつているのでは……」

この仕事の量に並々ならぬ疑問を抱きつつも、やっと開いた穴から部屋の中に入った。

どうやら、飛鳥は居ない様だ。厠にでも行っているのか？しかし、本当にすごい量だな……ん？何だこれは……

「白紙？何故こんな物が……よく見てみると白紙の物がたくさんある……」

実際仕事だと持っていた物はほぼ白紙だった。一体飛鳥は何をしようとしているのだろうか？

「……周瑜と孫策か」

山のような仕事の所為で閉まらない扉の向こうから、飛鳥が低い声で言った。

「何しに来たんだ。邪魔だから出てってくれ」

「え、えと、お土産を持ってきたの。ここに置いておくわね」

雪蓮はあたふたしながらもお土産を渡す。飛鳥はそれを仕事の山の中にぽい、と投げ、そのまま雪蓮と私を睨んだまま口を開かない。……飛鳥はかなりやつれていた。前の面影など何も無い。この仕事の量だ、ちゃんと寝れてないのだろう。

「……うるさい。出て行け。そして二度と入ってくるな」

やっと口を開いたと思うとそう言った。雪蓮は柄にも無くしゅんとしているが、私を感じたのは……

「飛鳥、何をそんなに怯えているんだ？孫呉の中にお前の敵は居ない。皆味方だ。何か心配なことがあるのなら相談に乗るぞ？」

飛鳥は何の反応も見せず、ただ一言出て行けと言うと私達を追い出して鍵を閉めた……

「……ほら、何かおかしかったでしょう？」

「……ああ。そうだな。でも今は放置しておいたほうが良さそうだ」

しゅんとした雪蓮を励ましながら、私達はそこを後にした……

「……祭じゃない。今日はお休みじゃ無かった？」

部屋への帰り道、廊下を歩いていると、前から祭が歩いてきた。何か慌てている感じだ。何かを無くしたりしたのだろうか？

「おお。策殿か。いや、わしの部隊の兵が一人見つからなくてな。少し前に編入した新入りで、なかなか筋が良いからこれから個人的に鍛錬を付けてやろうと思ったのじゃが……」

「ほう。それは大変ですね。私も探すのを手伝いましょうか？」

「……ねえ冥琳」

「そうしてもらつと助かる。城は大体回ったからわしは街を見てみようと思う。冥琳はもう一度城を見てきてくれんかの？」

「……冥琳ってば」

雪蓮がうるさいがあえて無視する。私の経験上ここで反応しては悪いことしか起きないと分かっているからな。

「分かりました。それでは、日が頭上に昇る時間にここで落ち合いましょう」

「ちょっと、冥琳！」

はぁ。しつこいな、どうせ雪蓮は人探しなど頼んでもしてくれないだろうし……

「……何だ雪蓮、私は今から人探しをしなければならぬから、先に帰っていてくれないか？」

「待つて、何か臭わない？なんというか、腐敗臭みたい……」

……雪蓮に言われて注意深く嗅いでみる。確かにそんな臭いがするな。どこからだ？

……あそこか。何だ？地面から臭いがする。掘り返してみるか……

「雪蓮、道具を持ってきてくれないか？少し掘り返してみる」

雪蓮は倉庫に走って行き、すぐに道具を持ってきた。だが、後々私は掘り返したことを後悔することになる。

「酷い臭い……これは、人間？この服は孫呉の……頭に矢が刺さっている。これが死因みたいね……あれ？この矢って確か……」

私達が見つけたのは、腐りかけの人間の死体だった。服装からかろうじて孫呉の兵だと分かる。雪蓮が頭に刺さった矢を抜き、まじまじと眺めている。

「……この矢は、飛鳥が使っている矢よ。祭、見つからない兵ってこの子じゃない？」

「う、うむ。たしかこの者だ。あいつが付けておった首飾りがあるからな。だが、飛鳥の矢というのはどういことじゃろう」

「……雪蓮よ、飛鳥の様子がおかしいというのはこれが原因では無いだろうか。何故こうなってしまったかは分からないが、飛鳥は孫呉の兵を殺してしまった。その所為でそんなに怯えているのではないか？」

「そ、そうかもしれないわ。でも味方の兵を殺したとなっては処刑するしか……」

「……もし本当に兵を飛鳥が殺したのならわしが飛鳥を殺す。異論は認めん」

祭は普段は見せないような形相をしていた。……そういえば、ここは飛鳥の部屋から丸見えではないだろうか？

首を捻り、飛鳥の部屋のほうを見る。

飛鳥と、目が合った。

孫策と周瑜が部屋を出て行くと、俺は仕事を一箇所に纏め始めた。

その途中、孫策が置いていったお土産を見つけた。毒でも入っているのだろうか？

少し興味を持った俺はそれを開けた。中に入っていたのはいつぞかに食べた八チミツ餡饅頭だった。

「懐かしいな……もう数年も前のことみたいだ。あの時は俺が孫策のことを泥棒だと勘違いしたんだっけ……」

俺は危険も省みずそれを一口食べる。少し前にはそれが間違いと

分かっていたのに……

「ごほ！な、何だこれ、ど、毒なのか？ごほっ、がはっ！」

その饅頭は、一度食べた毒草の風味に似ていた。食べたことのある俺が言うのだから、恐らく毒だろう。

俺は毒饅頭を吐き出した。……駄目だ。孫策は俺を殺そうとしているんだ。油断してはいけない。

今回は飲み込む前に気がつくことができたが、もし飲み込んでいたら……考えたくも無い。

窓の外から話し声がする。声から見て孫策、周瑜、黄蓋のようだ。……そういえば、あそこはこの前死体を埋めた所では無かっただろうか？

窓から、外を見る。

周瑜と、目が合った。

「……しまった。これで孫策に俺を殺す口実を与えてしまう……」

俺は確かに見た、聞いた。

黄蓋が俺を殺すということ。

孫策が俺の矢を持って死体を眺めていた所を。

周瑜が俺を見ていたところを……

どうする？やはり逃げるか。

逃げるならば早くしなくては。すぐに俺を捕縛しようとする孫策たちはやってくるだろう。さすがに三人相手に突破できると思っているほど自信過剰ではない。

俺は前々から纏めてあった荷物と弓を持ち、部屋を飛び出した。

全速力で門へと走る。とりあえず城から出て街へ入ればそう簡単には見つからないはずだ。せめてそれまでは孫策たちに見つからないでくれ……

……今まで数週間運動をしていなかったツケが回ってきたようだ。走っている足が軋み、荷物を背負っている肩は悲鳴を上げる。

それに結局、俺の願いは叶わず、目の前に現れた人物によって足が止まった。

「はあっ、はあっ……蓮華様、そこを退いてください」

俺の前に現れたのは、孫権……蓮華様だった。手には剣が握られている。

「飛鳥、どこへ行くつもりなの？」

やはり孫権も俺を殺そうとしていたのか。くそ、俺が何をしたら言っただい！

「はっ、はあっ……ここから逃げるんだ。孫呉は俺を殺そうとしている。孫権、お前もだろう？」

「飛鳥？何を言っているの？私達が貴方を殺そうとしている？孫呉の兵を殺したのは貴方じゃない。お姉様から聞いたけど、何故兵を殺したの？」

孫権は全く俺が何を言っているのか分からないといった風に首を

かしげ、俺に質問をする。

「俺は騙されない。お前等は俺を殺そうとした。仕事地獄に追い込み、刺客を差し向け、あまつさえ毒の入った食べ物。そこまで分かっているのに何故白を切る！」

「え……？し、刺客？毒？な、何を……」

「まだ認めないのか！それともなんだ？孫策や黄蓋が来るのを待っているのか？それはそうだよな！お前では俺を殺せないもんなあ！」

「蓮華様！そこを退いてくれ！」

俺の後ろから黄蓋の声が聞こえた。その瞬間感じたのは胸への痛み。矢が貫通していた。これは俺の矢だ……

重力と痛みに耐えられなくなり地面へ倒れこむ。視線の先から周瑜が走ってくるのが見えた。

「蓮華様、大丈夫ですか、お怪我は無いですか？」

それに続いて孫策、黄蓋がやってきた。矢を放ったのは黄蓋のようだ。はっ！復讐ということか。暗殺しようとしたが逆に暗殺された部下の尻拭い、大変だな！

「え、ええ。で、でも飛鳥が……」

「この者は孫呉に反旗を翻す犯罪者です。殺されて当然でしょう……」

「め、冥琳、それは本当に言っているの？本当に飛鳥が裏切るうと
していたと思っっているの？」

「賈羽は孫呉の兵を殺した。それだけで殺されるには充分な理由
よ」

「お、お姉様……」

はあー。もうそろそろ終わりかな。血がどくどくと流れていくの
が分かるし、眼も霞んで来た。

でも、なんでこんな事になってしまったんだろう。どこで道を間違
えたのだろうか？俺はただ仕事をやっていただけなのに……

「賈羽、言い残すことはあるか。裏切り者のお前だが最後にそれく
らいは聞いてやる」

眼に涙を浮かべた孫策が俺の前に立つ……俺を殺したかったんだ
ろっ？何故泣いているんだ。

「……け……ごめ……や……そく……」

声を出そうとするが、喉が動かない。

くそ、これで終わりか……

それが俺の最後の思考となった……

……鳥のさえずりが聞こえる。どうやら朝になったようだ。空は
晴れ渡っているが俺の気分は全然晴れない。

「う、うう、また夢だ……でも今回はいつもの夢と少し違ったな……」

昨日、一ヶ月ほどの仕事地獄から開放されゆくりしていた俺。
それを『飛鳥が構ってくれない』というふざけた理由で雪蓮様が
俺を後ろから叩き、叩いた本人がびっくりするぐらい錯乱した俺は、
今日一日ずっと寝込んでいた訳だが、案の定悪夢を見て、寝巻きを
汗でびしょびしょに濡らして飛び起きた。

今回の夢はいつもどおり最後に死んでしまうのは変わらないが妙
に生々しかった。まあ、夢みたいなきっかけが起こらないとも言えない
訳だしな。

「はあー。後で雪蓮様に謝ってこないと……かなりびっくりしてたからな」

俺は窓の外から薄っすらと浮かぶ満月を見ながら、雪蓮様がどんな反応をするかを考える。

だがこのとき俺はまだ知らなかった。霊帝が亡くなり、再び大陸が混沌に包まれようとしていたことを……

16・満月が出る頃に 解（後書き）

ごめんなさい。夢オチでしたw

最初はこのまま物語を進めるつもりだったのですが、そうすると最後のほうで辻褄が合わなくなりそうだったので……
とまあ、ベタベタな夢オチでした。

飛鳥君のおかしい行動の原因&勘違い

1・飛鳥君が昼食時間オーバーしたわけ

これはまあ、疲労でおかしくなっていただけですね。
それを飛鳥君が勘違いしちゃったと。

2・孫呉のみんなが飛鳥君をハブってたわけ

これもまあ、勘違いですね。

皆仕事が多かったので遭遇できなかっただけです。

-----ここから夢-----

3・孫呉の兵が飛鳥君を殺しに来たわけ

この兵は他の国の隠密。

祭さんが言っていたように新入りです。

それを少し実力があるので引き上げられた、と。

まあ、飛鳥君の勘違いですね。

4・空白の書簡を一杯持ってたわけ

これはまあ、精神崩壊しちゃった飛鳥君。

空白の書簡を仕事と勘違いして一杯持ってただけです。

飛鳥君の勘違いですね。

5・饅頭の中に毒が入ってたわけ

これはまあ、前述と同じく精神崩壊した飛鳥君。

ついでに味覚も狂って昔食べた毒草と重なったと。

まあ、飛鳥君の勘違いですね。

6・飛鳥君が最後に言おうとした言葉

「桂花、ごめん。約束守れない」ですね。

自分が死にそうなときに、飛鳥君カッコいいです。

こんな感じですか。

ご都合主義で申し訳ないです。

17・やっぱり袁家は揃いも揃ってバカらしい

第十二代皇帝、霊帝が死去。

が、そんな事は俺にとってどうでも良い。正直、無能な漢王朝の無能な皇帝が死んだって俺がどうこうなるわけではない。

それ以外にも、

何進とか十常侍とかが宮廷をめちゃくちやにしたり、後継者を暗殺したり、

いつの間にか何進が死んでたり、十常侍も死んでたり、

董卓が何進と十常侍の争いに割り込んで漁夫の利を得て、いつのまにやら献帝を皇帝にしたり、

その途中何があったのか分らんが、そんなこんなで最終的には董卓が洛陽を占拠してた。

みたいなことがあった様だがそんなことも俺にとってはどうでも良い。政争？なにそれおいしいの？って感じた。

そんなことよりも重要なのは、少し前に袁紹から届いた檄文である。

袁紹の書いた暗号っぽい文章をそのまま読むと主に俺の精神が崩

壊しそうなので、ここでは割愛する。だって、文に高笑いの表現が入っていると、バカなの？死ぬの？って感じた。

驚くほど簡単に要約すると、

『自分も頑張って十常侍とかぶつ殺したのに、董卓しか良い思いをしてなくてムカつくから董卓を皆で袋叩きにしておしまい！』

ってことらしい。反董卓連合……要するに私怨だ。

だが、孫呉はそれを利用して独立への足掛かりとさせて貰う事にした。

それにはまず、袁術が参加しなくてはならない。一応、袁術の配下と言う事になっているからだ。

てことでまあ、いつもどおり俺が袁術の城に居た……

「袁術様は反董卓連合に参加なさるのですか？」

相変わらず袁術の思考回路はぶっ飛んでそうだからな……警戒しないと手痛い反撃を受ける恐れがある。主に雪蓮様から。

「なんじゃ、久しぶりに来たと思ったたらいきなり。その『はんとうたくれんごう』とはなんぞや？」

「え？この檄文が届いてないんですか？」

まさか、そんなことは無いだろう。仮にも袁術と袁紹は同じ袁の名を冠す者だ。その袁術に檄文を送らないとか……

いや、逆にこいつの実力が分かりきっているから送っても戦力になるわけじゃない。おーほっほっほ！ってこともかも。

「ん？なんじゃそれは。七乃、あんな物届いておったか？」

「うーん。私は見てないですね」

「……はい、これが孫呉に届いた檄文です。俺が読んだ方が良いでしょうか？」

「うむ。妾は字を読むのがキライじゃからな！」

はい。見た目どおり、性格どおりですね。そんなこと言われなくても予想できます。

「えーっとですね、この檄文の送り主は袁紹さんで、その内容は『董卓ぶっ潰そうぜ』です」

「……なんじゃとっそもそも、とうたくとは何じゃ？喰べられるのか？」

そこからかよ……あ、でもこちらの都合の良い様に説明すれば面倒なことにならずに済むかも……

「董卓とは、この大陸に舞い降りた悪魔です。董卓は目は二十、口は耳まで裂け、腕は左右合せて百本もある化け物で、自らの大好物である八チミツをこの大陸から次々と奪い取ってるんです。その非道な行為を止めさせる為に、袁紹さんは立ち上がりました。袁術様も八チミツを守るために戦いましょう！」

「よし！七乃、参加するぞ！八チミツにおいて妾に敵う者などいないと董卓に教えてやるのじゃ！七乃、知っておるか？八チミツは蜂の巣から取れるのじゃぞ？」

……何か、董卓にとっても可哀想なことしちゃったかもしれない。ごめんね、見たこともない董卓さん。

まあ、八チミツの常識を自慢しながら話している袁術が、もう董卓がどんな人かを覚えているとは思えないが……

そういえば、張勳さんも居るんだよな。あの人は袁術一筋だから大丈夫かな？

「しかもな……おお、ところで賈羽よ、お主らも当然、董卓を倒す戦いに参加するのじゃな？」

「ええ。もちろんです。では、俺は準備をするために戻ります。時期になったら人をよこしてください」

俺は、今尚自分の八チミツうんちく……常識ばっかだけど……を
語り続ける袁術を放って置き、嬉々しながら玉間を出て行った……

「おおー！これは凄いです！やっぱり、黄巾党討伐の時とは規模が全然違いますね！」

かなり端折ったが、俺が居るのは反董卓連合が集まっている場所。丁度、？水関から十里ほど離れた所だ。

ここには、表向きは董卓を倒すため、裏では名声を得る為に参加している諸侯たちが集まっている。

主なものには、発起人の袁紹、その北に位置する公孫賛、曹操、義勇軍から相に成り上がった劉備、そして袁術などがいる。

で、今は前述した？水関を攻略するためにここに集まっている。

しかし、やはり壮観である。

袁紹、袁術は黄色。

曹操は青。

劉備は緑。

孫呉は赤。

公孫賛は……分からないが、それらがまるで絵を描いている様に布陣している。

その規模も、賊討伐の時とは比べ物にならない。およそ二倍はあるのではないか？孫呉も雪蓮様の勇名を利用し、かなりの補強を図っているしな。

「飛鳥、感心するのも良けどこれからのことに気を配ってね。このあと軍議があるんでしょ？私行くのめんどくさいから冥琳と一緒に行ってきてくれない？」

……相変わらずこの君主様は。確かにこれから行われる事を考えるとそう言いたくなるのも分かるが……

「雪蓮、そういうのは軍の代表が行くべきだと思うが？それに私とはかく、飛鳥はただの一将兵だ。そんな重要な軍議に参加させるわけには行かないだろう」

「いやよ。全く興味ないもの。それに、どうせ腹の探り合いをするのは目に見えてるじゃない？そんな疲れることしたくないわ」

「私だつて行きたくないに決まってるでしょ？」

……当然、そんなのは皆嫌に決まってるじゃないか。腹の探り合いが好きな人が居るわけ無いだろう。それでも誰が行かなきゃならないんだよな……

「あ、あの雪蓮様方？もし俺が出席しても良いのなら俺が一人で行きましようか？」

「さっすが！飛鳥ならそう言ってくれろと信じていたわ！」

雪蓮様は目をきらきらさせながら俺を見つめる。はあ！。相変わらずこのお気楽君主は。

「はあー。しょうがない、飛鳥、頼んだぞ」

「了解です……」

「それじゃ、飛鳥、頼んだわよ！」

雪蓮様は嬉しさを隠すこともしないで、他の軍の天幕へ走って行った……

冥琳さんは嬉しさを表に出すことは無かったが、その背中が笑っているように見えた……

「……はあ。行くとするか……」

俺は、とぼとぼ歩きながら軍議を行う天幕へ歩いていった……

「……なんじゃこりゃ」

俺が想像した袁紹は、頭がクルクルパーながらも、あの広大な土地を治めるだけの威厳がある女性だと思っていた。

だが、本物は俺が想像した以上に頭が（髪の毛も）クルクルパーだったようだ。

「おーっほっほっほ！」

この耳障りな高笑い……うぜえ。

「あら、随分貧相な男だこと。貴方はどこの雑用ですの？兵！この

男をつまみ出しなさい」

「ちよ、ちよっと！俺は孫策軍の者です！雑用でも何でもありませんよ！」

「あらまあ可哀相に。クルクルパーの袁術の傘下に居るような軍は、こんな貧相な男しか居ないのでしょね。おーっほっほっほ！」

……やべえ。驚くほどうぜえ。ていうか、確かに袁術もクルクルパーだけどお前に言われたくは無いだろっぜ……

「こら麗羽！妾はクルクルパーなんかじゃ無いぞよ！」

「そっだ、そっだあ〜」

……はあ。こっちもうぜえ。あんた等が喋るとややこしくなりそうだからできれば黙っていて欲しいのだが……

「はあ……」

俺は嘆息しつつも与えられた席へ座る。

……どっと今まで感じなかった緊張が押し寄せてきた。先ほどアホなやり取りをしたので余計だ。

俺は今、各国の君主と同じ立場に居る。そう思うだけで体中から冷や汗をかき続ける。

……緊張を紛らわす為に俺は軍議に参加している面子を調べ始めた。

まず、袁紹……は置いといて、公孫贇は……誰か分からないが、劉備は既に来ているようだ。あのほわっとした人かな？……曹操はまだ来ていないみたいだな。できることなら天の御遣いを一目見てみたいんだが……

「……聞いたわ。その耳障りな笑い声……麗羽」

気がつくと、天幕の中に女性が三人と、男性が一人入ってきているのが見えた。

「華琳さん。よく来てくださいましたわ」

「……………」

「さーて、これで主要な諸侯は揃った見たいですわね。それでは、最初の軍議を始めますわ。まずは、自己紹介から始めましょう」

さて、気を引き締めなきゃ。これが最初の戦いだぞ……

「……さて、次は美羽さんですね」

「妾は袁術じゃ。皆も知つとると思うが、河南を治めておる」

「そして、こちらが孫策さんの代わりにやってきた賈羽さんです」

張勳さんが俺に紹介を促す。ふうー……心の中でもう一度深呼吸をし、ゆっくりと立ち上がる。

「……孫策の代理で来た賈羽です。よろしくお願いします」

……一つ、礼をして席へ座る。

……ふうー、疲れた。諸侯の視線が痛い……なんで皆あんなに睨むんだよ……え？元農民がここに居て悪いか！

「それでは、最後は華琳さんですわね」

さっきの女性が曹操だったのか。ということは、天の御遣いは……

「……曹操よ。そしてこちらが我が軍の夏侯惇、夏侯淵、そして……

…北郷」

ざわざわ……

「……やはり」

思わず声を出してしまったが、それは他の諸侯も同じのようだった。誰もが驚きの声と目を向けている。

「あゝら。その貧相なのが天の御遣いとやらですの？そこにいる賈羽とやらより、ほーんのすっこーしはマシですが、どこの下男かと思いましたわ」

袁紹が俺を引き合いに出すと、諸侯の目も自然と俺に集まる。や、やめてくれ！田舎者はそういうのに慣れていないんだ！くそ、袁紹め、覚えてろよ……

「そして最後は私、袁ほんし……」

「それは皆知っているから、早く次へ進めてくれる？」

袁紹がどんなイラつく自己紹介をするかと身構えていたが、曹操がそれを阻止した。さすが曹操！

「で、では、最初の議題に参りましょう……現状の確認です……」

はあー。やっとか……

その後、基本的な事の確認……行軍方法、経路、敵の戦力の確認……を行い、その日は解散となった。

結果、？水関へは公孫軍と劉備軍が連携をして叩くことになった。

あ、それとどうでもいいことだが、反董卓連合は袁紹が取りまとめることになった。どうでもいいけど。

「えーっと、うーんと……孫策の代理！」

とつても疲れた軍議が終わり、自分達の天幕へ帰ろうとしていたとき、夏侯惇さんが俺を呼んだ。

「はい。なんででしょうか？」

「我が主がお前の主と話がしたいと……」

「いえ、賈羽とやら、貴方で良いわ」

「か、華琳様!？」

どうやら、曹操様は俺と話がしたいらしい。別に急ぐ用も無いので付き合うことにする。あ、でもあんまり遅いと雪蓮様が怒るかも

……

「……曹操様がただの一将兵である俺に何の御用でしょうか？」

「いえ、そういえば私の部下が、賈羽という者が居たらとても使えるので取り立ててやってください。と言っていたから、どんな人物かと思ってるね」

桂花か……

「……人違いじゃありませんか？俺はただの一将兵。しかも元農民ですよ？」

「あらそう？まあ、貴方が人違いなのは今回の戦いで見させてもらうわ。孫策の実力もね」

曹操様はそういうと、自らの天幕へ帰っていった……

「はあ。俺も帰るか……」

結局、帰りが遅い、冥琳が愚痴愚痴五月蠅いと、なぜか俺が雪蓮様に怒られる羽目になり、袁紹のことも含めて俺に多大な精神的不安がのしかかったのは言うまでも無い。

軍議の日の夜……

人気の無い陣の外を歩くのは、孫策軍の軍師として名を馳せる周公瑾。

松明の火すら届かず、鈍い光を放つ月だけを頼りにして目的地ま

で急ぐ。

彼女は、その場所である人物と落ち合う約束になっていた。

そこで行うのは、唯一無二の友人である孫策にも絶対に洩らす事の出来ない密議。

いずれ訪れる群雄割拠の時代を生き残る為の策の一つ。

その為に、彼女は息を切らせながらも落ち合う場所である草一つ生えていない小高い丘まで走る。

その上には既に人影が見える。相手はもう来ている様だ。

相手は彼女を見つけると座っていた腰を上げ、彼女に歩み寄る。

「周瑜、遅い。唯でさえここまで来るのは危険なんだ。時間は厳守して貰わないと困る」

「すまない。伯符を撒くのに手間取った」

男は、はあー。と一つため息をつく、再び地面に座りなおし話を進める。

「……まあいいや。これが成就したら俺もあんた達に降るわけだし。それでは、早速本題に入る」

「ああ。私からの状況報告だ。標的への仕込みは十分。支障は無いだろう」

「了解。こちらもこのまま行けば予定通りに行くと思う。俺の主様は反董卓連合が終結したらすぐに天下統一へ動き出すだろうから、孫呉が狙われるのも時間の問題だよ」

「当然だ。それを見越して私はお前に近づいたんだからな」

周瑜は小さく微笑みながら丘の上へ歩を進め、反董卓連合の全軍を一望する。夜なのでよく見えないが、所々に松明の赤とも橙ともいえない光が見える。

それを見ながら、周瑜はこれからのことを思索する。

「だが、この策が成ったとして、我等に勝てる見込みがあるものか……」

「おいおい、何があっても勝ってもらわないと困るんだけど」

「ふっ、分かっているさ」

さっきとは違い、楽しげに周瑜は笑った。

……男の目が、こちらに近づいてくる一つの影を捉える。服装から見るに孫呉の者と男は察した。

「それじゃ、そちらのお迎えが来たようなんで俺は戻るよ。これからは打ち合わせをする機会が無いと思うから状況に応じて動くから。今度は仲間として会おう」

男はそう早口に言うと丘から立ち去っていった。周瑜は、それは目もくれず迎えに来た賈羽のほうを見る。

賈羽は丘を走って登り切ると、息を切らせながらも口を開く。

「はぁ、はぁ、め、冥琳さん。勝手に居なくならないでくださいよ。」

もう、何かあったら全部俺に押し付けるんですから」

「すまないな。少しもう一度味方の戦力を調べておこうと思って見に来ていたんだ」

「え？……へえー。綺麗なもんですね。昼間見たときはまた違います」

賈羽は身を乗り出し、まるで子供のように陣を眺めている。

「飛鳥よ、私を呼びに着たのではないのか？」

「あ！そうでした。ほら、早く戻りますよ！怒られるのは俺なんですから」

二人は、その場は何事も無く丘を立ち去る。

後の周瑜の敗因は、このときもう一人この密議を聞いていた人物に気づけなかったことだろう。

ああ、もう！

何で雪蓮様はこう言つめんどくさいことは全部俺に押し付けるかな？

冥琳さんも冥琳さんだ。勝手に居なくなったら俺が搜索隊に駆り出されるに決まってるって分かってるはずなのに……

はあ。愚痴を言っても始まらないし、素直に探すか……

お、小高い丘に人影を発見。あそこか。

……何をやってるんだろっ？気のせいか、もう一人居るような気が……

「はあ、はあ、め、冥琳さん。勝手に居なくならないでくださいよ。もう、何かあったら全部俺に押し付けるんですから」

……気のせいか。夜だし何かと見間違えたんだろっ。それにしても、何しにこんな所まで……

「すまないな。少しもう一度味方の戦力を調べておこうと思って見に来ていたんだ」

「え？……へえー。綺麗なもんですね。昼間見たときはまた違います」

冥琳さんが指差した方を身を乗り出して眺める。

等間隔に赤い光が点々と燈っている。

「飛鳥よ、私を呼びに着たのではないのか？」

「あーそうでした。ほら、早く戻りますよ！怒られるのは俺なんで

すから」

危ない危ない。当初の目的を忘れてまた雪蓮様に怒られる所だった。

俺は冥琳さんの手を引き、天幕へ連れ帰る。

「……………人？」

その途中、岩陰に人らしき影が見えたが、目を凝らすとその影は居なくなっていた。

でも、俺には確信があった。

あの後姿…………いや、あの格好は見覚えがある。

特徴的な猫を模した耳。それだけで断定できる。

「……………桂花……………」

「飛鳥？どうかしたのか？」

「い、いえ。何でも無いです。早く帰りましょう」

その場は冷静に振舞うが、本心で言えば今すぐにでも追いかけた
い。

俺は先程よりも幾分か早く歩き、冥琳さんを連れて帰った。

「あ、冥琳と飛鳥お帰りー。って飛鳥、どこ行くの？」

「え、えつと……ちょっと落とし物をしたんで探してきます」

雪蓮様に冥琳さんを引き渡し、すぐさま立ち去ろうとすると雪蓮
様に呼び止められた。

とっさに言った落とし物の件はもちろんでまかせだ。

「そうなの？私も探すの手伝おつか？」

「い、いえ。自分しか分からない物なんで俺だけで大丈夫です」

尚、雪蓮様は自分も探すと詰め寄ってきたが、丁重にお断りし桂
花を見かけた場所に走った……

飛鳥が焦ったように飛び出して行き、入れ替わりで見張りの兵が
駆け込んできた。

「そ、孫策様、周瑜様！て、敵です。董卓軍がやって来ました！」

敵？夜襲を仕掛けてきたということか。予想通りだな。

「分かった。私もすぐ行く」

夜襲対策のために見張りの兵は増やしているし、兵糧が焼かれる

可能性を考えて兵糧を守るためだけに五百の兵を動員している。

多少の被害は出るだろうが、見張りの兵に敵襲があった際の対応は教え込んである。

「雪蓮。夜襲を仕掛けて来ているのは恐らく？水関を守る華雄と張遼だろう。私は兵の指揮をするから、お前は祭を連れて将のほうに行ってくれ。一つ言っておくが、お前は絶対に戦うんじゃないぞ」

「りょーっかい」

雪蓮は嬉々としながら指示したほうへ走っていった。あの様子では守る気は無い様だな。

改めて辺りを見渡す。どうやら敵はこの辺りには入り込んでいないようだ。

金属音が聞こえてくる方を見るに集中攻撃を受けているのは袁紹か。

袁紹の兵の数は多い。混乱した兵を立て直すのは至難の業だろう。無駄に兵数があるのが仇になったな。

敵は、一撃離脱で？水関へ撤退していったようだ。

孫策軍の被害はほぼ0。逆に一番被害を受けた袁紹軍は千人ほどの兵と、兵糧が半分ほど焼かれるという被害を受けた。

やはり敵は袁紹を狙って攻撃してきたようだ。総大将だというのがもう漏れたのか？

そんなことを考えていると、どことなくイライラした様子の雪蓮と祭が現れた。

「雪蓮、お疲れ様。こちらの被害は無いに等しい。祭殿もよくやってくれました」

「ただいま。はあ、折角久しぶりに強いのと戦えると思ったのに私が行った方には将は居なかったわ」

……溜息をつきたいのはこちらだ。念を押して戦うなど言っておいたのに戦おうとするとは……

「まあ、策殿が暴走するのを止められたのだから、少しはわしに感謝してもらいたいな」

「ええ。少し不本意ですがその点に関しては感謝します」

「ところで、明命と思春は？」

「ああ、明命たちにはもう一度詳しく被害の状況を調べてもらっている。それと同時に他軍の被害もな」

ちなみに、蓮華様と穩は独立のための下拵えとも言える作業をしてもらっているため、今ここには居ない。

「冥琳、飛鳥はどこにおるんじゃ？わしはお前と一緒にいると思っておったんじゃが……」

……そういえば、戦闘が終わる前から飛鳥を見掛けていない。報告にあがっていないため、戦闘に巻き込まれて死んだということは無いと思うが……

もし生きているのならすぐに戻ってくるはずだ。他に考えられることといえば……敵に捕縛されたのか？

最悪の可能性として『あれ』が飛鳥に漏れてしまったという事も考えられるが……

「私は飛鳥を見かけていません。明命たちが戻ってきたら一度聞いてみましょう」

「え？飛鳥さんですか？私は見てません。報告にも上がってなかったみたいですし」

「明命に同じく私もです」

……一体全体どこに行っただろう？まさか、敵前逃亡したわけでは無いだろうな？

「あ、そういえば曹操軍の軍師も一人行方不明らしいです。名を荀？とか言いました」

荀？……そういえば、この前飛鳥に曹操陣営の話をした時、荀？の名前に異常に反応した節があった。

今回のことと関係あるのだろうか？

「飛鳥は董卓軍に捕らえられている可能性がある。最悪の場合は既に殺されているかもしれない。今はとりあえず総大将である袁紹の指示を待つしかないだろう」

「……そうね。一旦飛鳥のことは忘れましょう」

結局その日、飛鳥が戻ってくることは無かった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3135w/>

真・恋姫†無双 キンモクセイと羽ばたく鳥

2011年9月29日05時12分発行